
すべてを撃ち抜くスナイパー

次郎長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてを撃ち抜くスナイパー

【Nコード】

N8502Y

【作者名】

次郎長

【あらすじ】

葬儀社、それは日本の開放を目的に活動する組織である。

その組織に属している男の話

設定（前書き）

少ないですが設定をのせておきます。

設定

オリジナル

主人公

ヒノカシ

氷野 檉 次郎

ジロウ

所属 葬儀社

身長 177cm

年齢 23歳

髪 黒 短髪

家族構成 ××××

ヴォイド ××××

武器

スナイパーライフル

イーグル・アイ

眼鏡型の装備で、脳に刺激を与え活発に活動させ、視力、動体視力の上昇、目では見えない物の温度、風の流れが見える。

副作用は××××

性格

面倒見がよく冷静、しかし大人げない部分も

概要

葬儀社の最古参、何を考えているかよく分からず、なぜ葬儀社にいるのか、涯の下にいるのかは不明

狙撃の達人でイーグル・アイの補助なしで狙撃1.5kmまで可能でイーグル・アイの補助があると3kmまで射程距離が伸びる。

接近戦も出来るが達人級ではない

いのりに銃と接近戦のノウハウを教える

次郎の秘密兵器

秘密兵器1

「イーグル・アイ」

すごい眼鏡

秘密兵器2

「ワサビスプレー」

ワサビエキスを濃縮したスプレー、粘度があるから中々とれない、
イメージキャラ「ワサビ丸（次郎作）」が目印

秘密兵器3

「????????」

設定（後書き）

秘密兵器はどんどん増えます

第1話 葬儀社の男（前書き）

初投稿する次郎長と申しますものです。

投稿はゆつくりとしたペースになりますが、今後ともよろしく願
いします。

第1話 葬儀社の男

葬儀社、日本の開放を目的に活動する武装組織である。

この組織のボスは恙神 涯（ツツガミ ガイ）―、ガイの言い分としては「自分達は常に淘汰される弱者を 送る 側である」とは言っていたが実際意味が分からない。

ついでに言っと私、氷野 檉 次郎（ヒノカシ ジロウ）―がなぜ葬儀社にいるのかもよくわからない。

メンバーの制服も気に入らない、この服考えたのは一体誰だ？

文句を言いながらも一応葬儀社の一員として制服を着ているが・・・

・・・

いのりの着ている服だつて前がほとんど開いていて、見た感じとてもはしたない、私服のセンスは申し分ないのだが、葬儀社拠点であるのカッコはやめてほしい。

いい年した男どもがいるのだからあの恰好は毒だと思う。

そう考えていた私はいのりの服装を注意しようと思いついているのだがどこにもいない。

本部を数十分ほど探したところ、いのりがガイの部屋から出てきたところを発見した。

相変わらずの格好である。

「いのり」

「あ、次郎・・・何？」

「少し話がある、私の部屋まで来てくれ」

ちょうど例の服装をしているのでちょうどいい、柄ではないが少し説教をしなければ、

「分かった」

それだけ言い、私の部屋に向かいいのりはしっかりと後ろをついてくる、

それから少し歩き、私の部屋の前に到着する。

私の部屋のドアは声紋と指紋に認証されて開くので、私以外は誰も開けられないはずなのだが………

なぜか私の部屋で寝ている輩が3人いる。

しかもだ、部屋に置いてあるテーブルの上にはプリンが入っていたと思われる空の容器が大量に転がっていた。

寝ている輩の一人はツグミ、オペレーターの服装に身を包みのんきに爆睡中だ。

二人目は篠宮 綾瀬（シノミヤ アヤセ）一、アヤセは車いすに乗り食べかけのプリンを片手に持ちぐっすり寝ていた。食べている途中に意識が落ちたと考えられるな。

そして最後、アルゴだ。

アルゴが一番ひどい、アルゴはカーペットに寝そべり涎を垂らして部屋のカーペットを汚していた。

私は嫌な感じがしてすぐに冷蔵庫の中身を確認して愕然とした。

そう、大事に保存していた総数10個のプリンが全滅していたのである。

腹の底から煮えたぎるような怒りを冷静に抑え、冷蔵庫のミネラルドリンクを手に取り、500mlを一息に飲み干す。

「あの………次郎？どうしたの？」

いのりは私を困惑した表情で見つめる、

しかし私はそれを無視し、服装をいつもの黒いGパンとTシャツに着替える。

それからベッドの下に置いてある銀色のトランクケースとカバンを引っ張り出し、カバンの中に必要最低限必要な荷物を押し込めた、

「あれ………？次郎さん………？どこに行くんですか？」

アヤセは物音で目が覚めたようだ、しかし周囲の状況は目が覚めたばかりで把握していないようだった。

「アヤセ、ガイに伝えておいてくれ………今、この時をもつて私は葬儀社を抜けさせてもらうとな、それと部屋の物は全てアヤセの好きにしろ」

私は葬儀社メンバーの証である制服をアヤセに投げた。

「え！？ちよつと待って次郎さん！！」

アヤセは慌てて私を追おうとするが態勢を崩し転倒する。

「次郎………待って！」

いのりは私の腕をつかみ引き留めようとする。

「………いのり」

私はいのりを見て頭をなでた。

「なんで………？葬儀社を抜けるって………」

「いのり、あの前がガバツと開けた服装はやめなさい、年頃の女の子なのだからはしたないぞ」

返事になっていない言葉を最後に私は一度、この葬儀社を去った。

~~~~~数日後~~~~~

~~~~~

ガイは途方に暮れていた。数日前に葬儀社の最古参である氷野櫛次郎が理由も告げずに葬儀社を去ってしまったからだ。

ガイはその場にいた、いのり、ツグミ、綾瀬、アルゴに氷野櫛が去った理由を聞いたが全く分からなかった。

いのりに聞いてみれば部屋の三人を見たら血相を変えて荷物をまとめ出し、制止も聞かずに去ったと言い、部屋にいたツグミ、アヤセ、アルゴに聞いてみたところ、

アヤセは目が覚めたら氷野櫛は出て行くところだったと証言し、ツグミ、アルゴは寝ていて分からないと言っていた。

とりあえずガイはツグミに氷野櫛の行方を搜索してもらっているが、状況は芳しくない。

しかも明日は鍵を奪取する作戦の予定であり、作戦参加予定の氷野櫛がいないと氷野櫛の援護を当てにしていた作戦はかなり厳しいこ

となる。

しかもこれからの作戦にも響いてくることだろう、

こんな処でガイは、葬儀社は止まるわけにはいかないのだ、
「なにがあつたんだ………次郎」

ガイは一人暗い部屋の中でうなだれた。

第1話 葬儀社の男（後書き）

初めての作品です。

質問、意見、感想がありましたらよろしく願います。

第2話 元葬儀社の男（前書き）

短い時間で二人の方に感想をいただきました。
本当にありがとうございます。

なるべくすべての人に返信して行きたいと思しますので、
感想、質問、誤字脱字の指摘等、お願いします。

第2話 元葬儀社の男

葬儀社を抜けてから3日間、私は旅館で静かな時間を過ごしていた。起きなくなったら起き、眠くなったら眠り、暇な時間は書店で買った本を読みふけ、旅館の運動場で汗を流し、名もなき男と卓球で火花を散らし、そして温泉に入る。

時たま老人たちと茶をともにしたり将棋を指したりした。

ここでは時間がゆっくりと流れるようだった。

今日お茶を共にした御老人の夫婦は湯治に来ていたようで、ここは療養するのにちょうどいい場所だそうだ。

しかしずっとここに長居するわけにもいかない、長い時間同じ場所にとどまるとすぐにツグミに見つかってしまうからだ。

ツグミの本領はネットであり、この旅館は旅館で泊まった人間をほぼ全て紙媒体で管理しているために見つかる心配は少ないとはいえ、油断は全くできない。

同じ場所に留まるのは最高でも3日にしようと考えている。

そして今日がその3日目であり、名残惜しくもここを離れようと思う。

人が優しく、ご飯がおいしくて温泉があるなんて場所はなかなか見つからないのでここを去るのはひどく残念だ。

私はロビーに向かい受付にいた若旦那らしき人にチェックアウトする旨を伝える。

お金は前払いしていたので鍵を返すだけだ。

「はい、ありがとうございます、旅館のサイトにて登録を行い会員になれますと、特別に15%オフお値段を割引いたしますので、料金15%をお返しいたしますがどうなさいますか？」

「入ります」

即答して自前の携帯で、旅館のサイトに入り素早く会員登録を済ませる。

私は割引やお得、無料と言言葉に弱いのでこういうのはついついネットで登録してしまうんですよね。

「登録ありがとうございます、では値引き分のお値段をお返しします」

私はお金を受け取り、足早に旅館を出る。

「またのお越しを」

仲居さんに見送られ私は街に向かった、

向かう場所は山を越えた先にある街に決めた。山を越える為の移動は基本は徒歩。

数少ない持ち物である銀のトランクケースとカバンはかなり重いのだが我慢するしかない。

自分の足で移動と言うのが最適だと思ったからだ。

郊外から離れた山の中を散歩するなんて事も少ないのでいい機会だ。第一にネットさえ使わなければツグミに見つかることなど……

……ない。

私はふと足を止め、冷や汗を流しながら本日自分が取った行動を思いだす。

朝起きて朝食を取り、軽く運動して汗を流したら温泉に入りいい気持ち……

昼食を取り卓球が異常にうまいお兄さんと勝負した後、御老人とお茶を飲みつつ将棋を指して……

……チェックアウト？

そういえば私はチェックアウト間際に割引と言言葉に釣られネットを使い会員登録をしました。

「……」

という事はまずいですね。

ネットを使ってから約30分、ツグミにかかれば携帯を開いただけでも場所が探知されてしまいますから急いで移動しないと捕まります。

早急に移動しようとした瞬間、少し離れた所からヘリの音が聞こえ

た。

「自分の性格が今回ばかりは仇となりましたか……」

私はカバンの中から黒いコートを出し羽織ると、道なりに走り出した。

「ガイ！！次郎の居場所を発見したわ！！」

ツグミは先ほど次郎が携帯の使用を確認し、ガイの元に報告に来た。ちょうど葬儀社のメンバーがほぼ集まり、明日の鍵奪還作戦について会議を行っている時であった。

「本当か！氷野樫はどこにいる？」

「街外れの森の中にある旅館からよ、旅館のサイトから会員登録したみたい」

ガイは顔に笑みを浮かべ自分の幸運を喜んだ。

あまり知られていない事実なのだが、氷野樫は儉約家で葬儀社の資産管理を任せていたので少しでもお金を浮かそうとする。

ガイは今回も氷野樫の性格に助けられた訳だ。

「六分儀はヘリを出せ！！いのりとアルゴ、それに綾瀬はついてこい！」

「ガイ！私も行くわ！」

ツグミは真剣な眼差しでガイを見た、ツグミはその場所にいた当事者だ。

少なからず責任を感じるのだろう。

「好きにしろ、遅れるな」

ガイたちは足早にヘリに急いだ。

他のメンバーたちは一刻も早く葬儀社の要、氷野樫の帰還を望んだ。

走ること数分、さすがに生身の体で、しかも重い荷物を持ちながらへりを振り切ることなどできない。

すでに追いつかれ、前にはへりとガイ、いのりに四分儀、後ろにはツグミ、アヤセ、アルゴがいる。

全員が俺を見つめている。少し気恥ずかしいですね。

いのりは今回ちゃんと葬儀社の制服みたいです、ね、関心関心。

それなのにツグミ、あなたの恰好はいただけません、オペレートをする時の服を外で着ないようにとあれほど……いや、やめましょう。

先に口を開いたのはガイだった。

「氷野櫛、なぜ葬儀社を抜ける。俺たちを裏切る気か？」

ガイは私を睨めつける、相当怒っているのか肩を震わせてまでするようです。

「ふむ、別に私は裏切ったという感覚はありませんよ」

「じゃあ………なんで」

いのりは私を泣きそうな目で見る。その目は今のガイが私を見る目と少し似ている感じがします。

それにしても四分儀は相変わらずピクリとも表情が変化しませんね。怒っているのか、泣いているのか、それとも可笑しいのか、はつきりしてほしいものです。

「氷野櫛さん！！すいませんでした！！」

振り返るとアルゴが涙を流し頭を下げていた。

アヤセとツグミはアルゴの姿を見て、釣られて頭を下げる。

「アルゴ？」

「すいませんでした………多分、俺たちが何かへマしたから氷野櫛さんは怒って葬儀社を………」

「みんな頭を上げてください」

私はそういうとアルゴたちは顔を上げた。

「アルゴ、男が泣いていいのは親が死んだときだけです、それに・
・・・皆さんは何に対して私に謝っているのですか？」

四分儀以外の皆の顔が困惑した表情に変わる。

「えっと・・・・私たちが部屋を汚したから・・・・」

「アヤセ、私はその程度の事で怒りはしませんよ、もっと根本的なことです」

するとツグミはオズオズと発言する。

「もしかして、部屋を勝手に開けて入ったから？」

「それも違います」

「この間の訓練で・・・・・あまりいい結果じゃなかった・
・・・・？」

「いえ、いのりの訓練結果は素晴らしいものでしたよ」

皆は何のためにここにきたのでしょうか、これではヘリのガソリンと時間の無駄ですね。

もう少し私と言う人間を皆は知っていると思ったのですが残念です。

「氷野櫨、少しいいですか？」

「お、四分儀は私が怒っている理由が分かりましたか？」

とうとう期待のできる答えが来そうですね。

「これは信じたくありませんが・・・・もしかして氷野櫨は我々葬儀社を見限ったのですか？」

嫌な空気が張り詰め、私はにやりと笑った。

そう、その答えこそ・・・・・

第2話 元葬儀社の男（後書き）

次回、氷野櫨 次郎が怒っている理由がわかります。

次回の投稿は未定ですが、皆さんは氷野櫨 次郎が怒っている理由
はわかったと思います。

感想の部分に怒っている理由を投稿してくださいますと、 をもれ
なくプレゼントいたします。

それではまたの機会に

第3話 裏切りか否か（前書き）

今回は表現が曖昧な部分が多々ございます。

感想、質問、誤字脱字、ご指摘等がございましたら感想欄にお願いいたします。

それと、2話の序盤部分に表現ミスがあるとご指摘いただいたので、書き直しておきました。

ご指摘してくださった零華さま、ありがとうございます。

第3話 裏切りか否か

「これは信じたくありませんが……もしかして氷野櫨は我々葬儀社を見限ったのですか？」

私は四分儀の質問を聞いてニヤリと笑う。

そう来たかと意表を突かれた気持ちでいっばいだ。

「次郎………本当なの？」

ツグミも私の表情を見て聞いてくる。

「………そう、その答えこそ………私が一番聞きたくない答えでしたよ、四分儀」

私は笑っていますがこれはきつと、色々な感情が交錯した結果なのでしょう。

今は表面上笑ってはいますが、うれしいとも、楽しいのも、可笑しいとも思っていないのですから。

「ガイ、今思うと葬儀社を抜ける時の私の怒りは非常につまらないものです。だってその時私が怒った理由はプリンを全て食べられたからですよ」

「は？」

その時ガイは非常に面白い顔をしました。クールな彼がめつたに見せない表情ですね。

他の皆も似たような表情をしています。

「じゃあ次郎はプリン程度の事で葬儀社を抜けるほど怒ったっていうの!？」

「はい、ツグミの言う通りです。私だって一人の人間ですし理不尽なことで怒りを感じ、その怒りで冷静さを失うこともあります。あの時の私は大人げなかったと後悔と反省はしていますが………」

私の行為は組織の人間としてはやってはいけない事の一つです。組織で地位の高い人間が怒りのあまり周囲が見えなくなり、どこかに

消えてしまつ。

これは子供の我儘以上に酷いものです。

「結局次郎さんは葬儀社に帰ってくれるんですか？」

アヤセは直球の質問を私に投げかける。実際このままのらりくらりと交わしたかった。

しかし先延ばしするのはあまり良くないことだ。

「そうですね………戻りたい気持ちはありますが、今は無理です」

よくない事だが、今は先延ばしにする以外の手はない。

私はコートの中に手を入れる。

「まずい！！誰か氷野櫨を止める！！」

ガイは気づいたようです。

まあ、理由もなく私が暑い中コートを着る理由なんてそうそうありませんね。

皆がガイの指示に一瞬遅れて反応した瞬間、私は服の中からスモーク弾の（・）形を（・）した（・）閃光弾2つとスモーク弾を8つ取りだした。

閃光弾はピンを抜き後方と前方に投擲、同時にスモーク弾を四方八方に投げる。

直後、辺りには凄まじい音と閃光、そして煙が立ち込める。

皆の感覚、聴覚、視覚を封じ逃走を図る。目立つコートは素早く脱ぎその場に放棄、銀のトランクケースとカバンを持ち逃走を開始した。

山の中に逃げ込み、ついでにもう一個閃光弾を投擲しておく、現在私の耳と目の半分は見えず聞こえはしないがそれで十分、この程度の山なら走破は可能です。

私は仲間たちに心の中で詫びつつ街へ向かった。

その頃ガイたちは煙幕の中で混乱していた。

勿論ガイたちは素人ではなく、むしろ重火器のエキスパートなので、煙幕程度では混乱などしない、しかし氷野樫の手が悪質すぎたのだ。最初に氷野樫が投げたスモーク弾は、見た目は葬儀社のメンバーがいつも使っているスモーク弾だった、それを見たら誰もが煙幕を使い逃亡しようとするだろう。

しかし、それが凄まじい閃光と音を辺りにまき散らしたというのなら誰でも度肝を抜かれるだろう。

しかも最後に状況確認をしている所に止めの閃光弾、ガイたちが状況確認できるのはこれから15分たってからの事だった。

「うう………次郎め、悪質な手をお………」

ツグミは目を擦りながら氷野樫に対し悪態をつく。

他の皆も似たような行動をして、まだ動けそうになく煙幕には催涙効果もあつたようだ。

「これより葬儀社本部に帰還する、へりに乗り込め」

ガイは目を赤くしながらへりに乗り込んだ。

「待ってくれガイ！氷野樫さんは探さなくていいのかよ！？」

「どうやってだ？氷野樫はすでに山の奥深くに逃げ込んでいるだろう、このへりで追いかけてようにもどこに逃げたか見当がつかん、ガソリンと時間の無駄だ」

「素晴らしい判断、さすがですガイ」

そう言つて四分儀もへりに乗り込む、今の言葉には若干の皮肉が交じっていた気がしたが、あまり気にしてはいけない。

「しょうがないわよアルゴ、よく考えたら私たちが次郎を捕まえられるわけじゃない、足で追つてもへりで追つても無駄よ、無駄」ツグミも早々に諦めてしまったようだ。アヤセも納得はしていないようだ、ガイの命令ならば仕方ないと思ったのか、黙つてへりに乗り込む。

「いのり、お前はいいのかよ！？」

しかしアルゴは諦めきれないようで、いのりの賛同を得ようとする。
「次郎は……『今は無理』って言った、だから待つ」
いのりもそれだけ言うとはりに乗る。

残るはアルゴだが、いのりの言葉に何も言い返せずにへりに乗った。
だが、葬儀社本部に帰還し氷野慇が戻らないという事は、鍵奪還作
戦の要が一人減るという事、これからガイたちはどうするのか……
・・・・・

~~~~~次の日~~~~~

まだ日の登り切ってはいない時間帯、私は未だに寢床を決められず  
にいました。

葬儀社本部から一番近い街のほうが意外に見つからず、『灯台下暮  
らし』と言うものではないかと考えてありましたが、電子機器をほ  
ぼ使かっていない宿泊施設がみつからなかったのです。山奥の旅館  
のように紙媒体での客の管理と言う非効率的なホテルなどあるわけ  
もなく、なんと一晩公園のベンチで夜を明かす羽目になってしま  
いました。

よく職務質問されなかったと、自分の幸運を喜びはしましたが一人  
寂しく公園で過ごす夜は精神的に寒々しく、いつそのこと葬儀社に  
戻っても、などと考える始末でした。

「そろそろ腰の落ち着ける場所は……」

周りを見回すと橋の先に古びた建物を発見した。

近づいてみると今は使われていない大学の施設のようで、人の気配  
はなさそうです。

「おじゃまします」

誰に言っているのか分からない挨拶を口走り建物に入る。建物内は  
コケや緑に多少覆われていますが当分の生活は問題なさそうです。



少し探索してみるとしましょう。昔はこういう場所を見ると秘密基地だ何だと心が躍った物ですが・・・・・・・・・・どうやら先客がいたようですね。

部屋の壁際にはパソコンと段ボールが積まれており、誰かがここを使用しているようです。

本来ならば早々に退散すべきなのですが、少し興味が湧いてしまいました。

パソコンに近づき触れてみます。

「ほお・・・・・・・・・・」

画面が映り、鳥が飛び立つ風景が再生されています。

とても美しく心安らぐものを感じますね。

「どれどれ・・・・・・・・・・ほかに映像は・・・・・・・・？」

色々と操作してみると、この映像は作り掛けのようです。この映像の完成は楽しみですが残念ながらその暇はなさそうですね。

外に人の気配がしました。この建物は出口が一つしかなく恐らく窓ははめ込み式、身を隠すほうが最善ですね。

私は面倒を起こさないためにも、荷物を抱え電源盤の前にある段ボール箱に身を隠した。

### 第3話 裏切りか否か（後書き）

主人公の設定を見たいという方がありましたら、設定資料を掲載しようと思っております。

ご覧になりたい方は感想欄までお願いします。

## 第4話 少年との出会い（前書き）

皆様のおかげで4000アクセスを超え、57人の方がお気に入り登録してくださいました。  
本当にありがとうございます。

## 第4話 少年との出会い

段ボールの中はカビ臭く埃っぽく、長い間放置されていたからでしょうかね。

大事な服が汚れてしまいました、もう少しいい隠れ場所があればよかったのですが、緊急事態ですし贅沢は言えません。

そして聞こえてきたのは誰かが足を引きずる音と………機械の駆動音？

どこかで聞いたような………

私は建物の中に入ってきた人物を見て驚きました。

赤い金魚のような服を着て、あの前がガバツと開いた服を着た少女、いのりが腕を怪我して入ってきたからです。

後からふゅーねるも入ってきますが、足が壊れているようです。

一応私は救急道具を携帯していますので、今出て行って助けてあげない事もないのですが、今いのりの前に姿を現すとガイたちに連絡を取られてしまう可能性もあります。

これは悩みどころです、あの程度の怪我ならいのりでも大丈夫かもしれないませんが………

その時です。私の目の前でとても困ったことが起きてしまいました。なんと、いのりが服の上部分を脱いでしまったのです。

誰もいない建物だからといってそれはまずいのではないのでしょうか？ しかもいのりのはのんきに歌を歌い始めてしまいました。困った物です。

まあいいでしょう、ですが再びの危機のようです、誰かがこの建物の中に入ってきたようです。

足音は一つですがいのりは気づいていないようです。

「しょうがないですね………」

無意識に私はそう呟くと、カバンの中からハンドガンを取り出し残弾数を確認。

一人ぐらいなら問題ありませんね。

私はハンドガンを構え、すぐに撃てるように準備をしました。しかし入ってきたのは少し予想外な人物でした。

多分普通の学生でしょうか？弁当箱を思しき物を片手にいのりの姿に驚きつつ近づいていきます。

思春期の少年なら仕方がないとは思いますが、半裸の少女を見つめるのは失礼かとおもいます。人の事は言えませんが……少年は足元に注意が言っていないようで、足元にある空き缶に気づかず蹴とばしてしまい、辺りには大きな音が鳴り響きます。いのりは素早く反応し素早く前を隠すと、ふゅーなるは少年の足に紐を射出し足元をすくいました。

「うわぁっ!？」

少年は見事に転倒し、弁当箱の中身をぶちまけていますが、この反応からするにG・H・Qの人間ではなさそうです、少し安心しました。

「あ! !あの……! !違って! !そんなつもり全然なくて! !」

何が言いたいのか全く分かりませんが、少年の弁解もむなしく、いのりも警戒心をまったく解いていません。

少年は弁当を拾うと、再びいのりに近づきます。

「君もしかして! !？」

いのりが後ずさりして机にぶつかり、その衝撃でP・Cが起動してしまっただようです。

私が見たあの映像が流れていますね。

半分予想が出来ていましたが少年がここの先客のようです。

「ま、まだ途中なんだよ! !僕の故郷の景色」

「綺麗」

「え……?」

これが青春の1ページと言う物でしょうか？傍から見ると悪くはない雰囲気だとは思いますが

ぐう~~~~~

いのりのお腹は色々な意味で自重すべきです。

さすがのいのりも恥ずかしそうに顔を赤らめますが、少年は優しくおにぎりを進めているようです。私もお腹が空きました。

15分後

二階？に移動したいのりと少年は、何か話しているようですが何を話しているのか聞こえにくいですし、私の一からでは見えにくいです。

一体何をしているのか気にはなりますが……………また誰か来たようです。

それも大勢、10何人の単位でしょうか？

私が気付いた数秒後に大量のGHQの兵隊たちがなだれ込んできました。

しかも一人階級の高そうな禿げ……………ではなく、サングラスをかけたスキンヘッドのおじさんもいますね。

いのりはすぐさま逃げようとしますが、残念ながら腕を掴まれてしまいました。

しかも兵士はいのりに銃身で打撃を与えます。

「学生か？」

「は、はい！あの……………その子怪我をしてるんです、出来れば……………」

「この女は犯罪者だ、庇うなら君も同罪として浄化処分するぞ？」

近くにいた兵士二人は少年に銃を向けます、相変わらずGHQは腐っていますね、さすがに私も限界がありますよ……………」

「データ照合の結果は……？」

「六本木の葬儀社の一員に間違いません」

「ふっ……テロリスト風情が!!」

ハゲはいのりの顔をけり上げ、部下に連行するように指示すると、引き上げていきました。

あの男はあとで報復させていただきましよう、顔も覚えまししたしね・  
・・・・・

「こんな俺でいいのか……」

情けないことに暴力の危険から解放されて、少しホッとしていた。その程度だ、僕は。

所詮彼女を相手にできる格じゃなかった。

僕はあやとりで「取って?」と言った彼女を思いだし、涙を流した。取りたかった、あの子に近づいて手を触れたかったよ。

だけれども、もう忘れよう……しばらく休めば心が回復する。

そしたらまた……いつもの僕に戻ろう。

そう思った時だった。

「少年!いのりを助けたいですか?」

突如声が聞こえ下を見ると、段ボールに埋もれた男が銃を片手にこちらを見ていた。

その男の髪の毛や、白いTシャツ、黒いズボンは埃で汚れていて、風体はまるで浮浪者だった。

「あなた誰ですか!?!」

「私ですか?通りすがりのスナイパーですよ」

明らかに怪しい、絶対に関わってはいけない人種だ。

「こ、答えになっていません!」

「それもそうですね、私は……ひとまずアイスマンとお呼びください」

「アイス……マン？」

絶対に偽名だ。

「そうです、あなたは……？」

「桜満 集です、桜が満ちて集まると書いて桜満 集」

「シユウ……いい名前です、では再度問います、あなたはのりを助けたいですか？」

「当たり前ですよ！！でも……力がありません……」

「では、私が手を貸しましょう、条件付きで」

何を言っているんだこの人は？さっきまで隠れていたくせにいのりを助ける？

僕を馬鹿にしているのか？

「ふざけないください……じゃあ何で隠れていないでいのりを助けなかつたんですか！？」

「その時ではないからですよ、そして今がその時です」

本当にふざけた奴だ、でも……見捨てたくない……

僕の決断は



#### 第4話 少年との出会い（後書き）

集の会話を敬語に変えました。

誤字脱字、悪い点、良い点、ご感想よろしく願います。

## 第5話 集の決断（前書き）

皆様のおかげで6000アクセスを超えました。  
読んでくださった方、本当にありがとうございます。

## 第5話 集の決断

「本当にいのりを助けることが出来るんですね？」

「ええ、条件は呑んでいただきますが」

私の言葉を聞いたシユウは気難しい顔をしてこちらを見る。

「条件って……お金ですか？」

「そんなのいりませんよ、それでも生活に困らないくらいのお金はありますし」

シユウは一体私をどんな人間に見えていたのでしょうか？

「条件は三つです、一つは私について詳しく詮索なこと、二つ目はこの場所を私の寢床として貸していただくこと、三つ目は三食暖かい食事を私に提供することです、おいしい物をお願いしますね」

「え？そんなのでいいんですか？」

シユウは呆けた顔をしてこちらを見る。とても面白い顔をしていますね、写真に撮っているのりに見せて上げたいぐらいです。

「もっと大変な条件のほうが良かったですか？それなら三食デザートをつけて頂きましょう」

「いえいえ！！それで十分です！！」

本当にこの子は面白いですね、昔の自分を思い起こします。

この子は私と違う人間にはなるでしょうが……

「では早速いのりを助ける下準備をしましょう、まずシユウはこの場所に行ってください、ふゅーねる」

私が呼ぶとノロノロと壊れた足で、足元にやってくる。

「このロボット……いのりが持っていた……」

「この子の名前はふゅーねる、ロボットですが感情は豊かですよ」  
そう言っふゅーねるを持ち上げ、中に入っている例の物を取り出す。

「えっと……アイスマン？さんは何でロボットの事を……」

「シュウ、詮索は禁止です」

「すいません……」

シュウは少し疑惑を感じたような顔をする、まあしょうがないですね。

私なんて夜歩いていたら即通報されそうな格好ですし。

「構いませんよ、時期が来たらお話ししよう、ふゅーねる、地図を出して下さい」

そう言うのと、ふゅーねるは六本木周辺の地図を写し出した。

「ではこの場所に向かってください、それとこれは肌身離さず持つように」

私はシュウにふゅーねるを手渡し、胸ポケットに遺伝子兵器？を入れた。

「これは？」

「シュウがいのりを救う切り札になりうるものです」

私の言葉を聞いてシュウの顔は引き締まり、責任感を帯びた顔つきに変化した。

立派な男の顔ですね。

「じゃあアイスマンさん、行きましょう」

「いえ私は準備がありますので、先に行ってください、何かありましたらこちらの端末に連絡を入れますので、耳に付けておいてください、ピンチになったら助けますよ」

そう言うて、私の数少ない持ち物である耳に装着するタイプの通信機器をふゅーねるの中に入れた。

「ありがとうございます、じゃあ行ってきます」

そう言うのとシュウは六本木に向かった。

私は彼の未来を大きく変えてしまったかもしれない、今さらになりそう感じた。

もし私が彼の背中を押さなかったら普通の生活を送っていただろう。

「まあ、今更後悔してもしょうがないですね、なるようになるですよ」

私は後悔をなるべくしない主義なので……

これから後悔しないためにも、下準備は入念にしないとイケませんね、

ポケットから携帯電話を取り出しある人物に電話をかける。

「もしもし？ジャックですか？お久しぶりです、今から私の私物を取りに行くので準備してもらえますか？ええ、『イーグル・アイ』も……」

僕は今ピンチだった、一応アイスマンさんに貰った通信機器を耳に付けているけど全然連絡がなく、地図のとおり歩いていたら異様に治安の悪そうな場所を通るし、怖い人たちが僕を見ている。それにととう絡まれてしまった。

「おいお前」

「あ、はい……」

スキンヘッドの男の人が近づいてくる、ほかに男の人が近くに3人もいるけど多分グルだと思われる。

「それ食べんの」

「え、何ですか？」

「それ飯？食べんの？」

「え、ああ……それはないと思いますけど……多分一氣に顔が近づく、正直本当に怖い。」

「置いてけよ」

「いや無理なんですよ」

殴られた、それも前置きもなしにいきなり、鼻血も出てきて相当痛い。

アイスマンさんは一体どこにいるんだ！？

ピンチになったら助けてくれるって言ったのに！！

「お前なめてんの？いいからそれ寄越せよ」

ダメだ、絶対に渡せない！

「ごめんさい！預かり物なんで、あの子が必死に守ろうとしてた、だから……すいません！！」

この言葉を言ったら殴られる、心の中でそう思いつつ、次の拳が来るのを待つ、

その瞬間だった、辺りが光で照らされた。

「ああ？」

ライトの光を背に一人の人物が現れた、台座のような場所に立ち金髪を風に靡かせ、黒い服に身を纏っている。

「やあ死人の諸君」

「ああ？死人だと？」

スキンツドは反応し凄みを効かせる。

「ああ、今この状況は君たちの生存を許さない」

そう言つて、僕たちの近くに飛び降りてきた、顔を見たが多分男だろうと推測される。

「故に、君たちは死んでいる」

言い回しは少し分かりにくい、これは明らかに挑発行為だ。

周りの男たちは怒りに駆られると思ったけど、全然違う反応だった。

「あいつまさか……」

「ガイ？」

男たちの言葉を察するに、畏怖の念か何かを感じた。

「勇気あんな、オメエ……アアツ！？」

スキンヘッドはポケットからナイフを取り出し、刺し貫こうと振りかぶる。

しかし、金髪の男ガイはナイフを持った腕を掴むと引き寄せ、腕の関節に打撃を与え、腕を捻る上げた。この間約8秒、最後に階段の下に突き落とした。

他の男たちも自棄になり襲い掛かるが、ことごとく反撃されてしまった。

男たちは悲鳴を上げて逃げて行った。

危機から脱出できた安堵感を感じていると、今度は目の前に女の子が現れた。

「うわぁ!?!?.....ってあれ?」

頭に動物の耳のような機械を取り付けて、全身を体のラインが浮き出るスーツを着ている。

「それふゆーねるでしょ?返して!」

女の子は強引にロボットを取ろうとするが、僕は本能的に抵抗した。

「駄目だ!!--これは預かった物だ!!--」

「何それ!!--ふゆーねるは私の物よ!!--」

再び取り合いになる。

「駄目だつて!!--これはアイスマンって人から預かったんだ!!--」

「アイスマン?誰よそれ」

そう言われて僕は返答に困る、僕もあの人が誰だかよく分からない。

「えつと.....髪が黒くて短くて薄汚れた白いTシャツに黒

いズボンで確か

「そんなことどうでもいいわ!!--」

「あ.....」

不意を突かれロボットを持っていかれてしまった。

ああ.....アイスマンさんになんて言えば.....

落胆していたところに、金髪の男が話しかけてきた。

「桜満 集か?」

金髪の男が近づき一瞬の沈黙。

「アレと一緒にいた女はどうした?」

「それは.....その.....」

その質問に僕は答えられずない、何をどう弁解しようと僕はいのりを助けることが出来なかったのだから。

「見捨てたのか?」

「くっ.....!」

始めてあった人間に見透かされた、その通りだ.....

ドンッ！！

その瞬間、遠くで爆発らしきものがあり火の手が上がった。

「ガイ！GHQの白服どもが街に入り込んで来てます！」

フードをかぶった男が今の状況を報告に来た、やっぱりあれは爆発？

「また・・・・・・・・GHQ」

火の手が上がる街を見て僕は、何も出来なかった自分を思い出した。



## 第5話 集の決断（後書き）

誤字脱字の指摘、感想、質問、良い点悪い点がございましたらよろしく願います。

## 第6話 スナイパーの仕事（前書き）

今回は少しグロテスクな内容があります、  
お気をつけてお読みください。

皆様のおかげで9000アクセスを超えました。  
本当にありがとうございます。

## 第6話 スナイパーの仕事

俺たちGHQが属するアンチボデイズは現在六本木に来ている。

仕事は葬儀社と六本木に住んでいる人間の駆除、すでに作戦開始されており辺りには火の手が回り、猥雑な町並みは瓦礫を化している。実をいうと人間を撃つことには何も躊躇いはない。引き金を引く相手が訓練用的から人間に変わったただけの事だ。

本当はこの作戦にあまり乗り気ではない、本音を言うならば無抵抗の人間を撃ちたくない、しかし仕事ならば別だ。

俺には守るべき妻と娘、そして同僚と自分がいる、すでにここは戦場なんだ。

他の事に構っている暇はない。

俺は今、二人一組で作戦に望んでいるのだが、実は俺のペアは正規のペアではなく、即興で選ばれたのだった。

しかも相手はいけすかない上司、本当に踏んだり蹴ったりだ。

「おい急げノロマ、お前のせいで本隊とはぐれてしまっただろうが」そしてこの毒舌、自分のミスを人のせいにしやがる。

「すいません・・・・・・・・・・」

残念ながら謝るすべしかな俺は下げたくない頭を下げる。

俺の上司は俺の謝罪が気に食わないのかボソボソと小言を言い始めるが気にしない、一々取り合っていたら胃に穴が開く。

本隊に合流しようとして数分間歩くと、少し広い道に出た、瓦礫で歩にくかったが広い場所に出ればこちらの物だ。

俺は上司を追い抜かしさっさと行こうとする。その時だった。

「危ねえ！！」

上司に首筋を掴まれ後ろに引き倒される、その瞬間ミサイルが飛んできて俺が通ろうとしていた場所が爆散した。

「な！？」

もしも歩いていたら俺の体はミンチになっていただろう。

「エンドレイヴがミサイルをぶっ放しやがったな……..  
エンドレイヴのパイロットは俺たち歩兵の事なんて気にしやがらねえ、よく覚えておけ」

それだけ言つと上司は先に進んでいった。

あの偏屈上司が俺を助けた？ 一体何の冗談だつて言うんだ……..  
・？

だが、俺だつて礼儀の一つや二つは心得ている、一応礼ぐらいはしないとな。

「あの……..命を助けて頂き

ムグツ！？」

「静かにしろ」

上司は俺の口に手を当て指さす。

上司の指方向には学生服姿の少年が走つていた。

「お前はあのガキを撃て、俺はあの派手な女を狙う」

「なっ！？ あんたは一体何を言っているんだ！！ ガキと女の子を撃つなんて胸糞悪いこと  
「

「黙れ、俺たちの任務を言ってみろ」

上司は冷たく俺に言い放った。

「上からの命令はこの辺りの屑どもを駆除すること、それが出来ないなら先にお前を撃つ」

上司の目は冷たい機械のような目だった、任務のためならなんでもする、俺を殺すなんて何とも思つちやいない、そんな人間だ。

「でも……..」

「気持ちわかる、だが仕事はこなせ、それがアンチボデイズだ」

そう言つと上司は物陰に頭だけ出し標準を定めた、これ以上何もいう事はないということだろう。

俺は心の中で何かが吹っ切れ、少年に標準を定める。

何かがおかしくなつてしまつたんだろう、俺を可笑しくしたのかこの場の雰囲気か、それとも上司か、はたまたさっきのミサイルの爆発か。

「先に撃つ」

上司は短くそう言った、俺も目の前のターゲットに集中し引き金を引こうとした。

その瞬間だった、周りが火で赤く染まっていた風景がもつと赤く染まった。

ベチャリともグシャリとも判別が付かないような音がした。

振り返るとそこには下顎から上がない変わり果てた上司の姿があった。

「は………?」

辺りに脳みそを思わしきピンク色の物体がぶちまけられ、俺の顔にも付着している。

状況が全く理解できない、しかし確実に死んでいる。

さっきまでそこで喋り、俺の命を助けてくれた名も知れぬ上司、そんな事を考えていると遠くのビルの上で何かが光った、目を向けたその時、二度目のベシャリともグシャリとも判別できない音が一番近くで聞こえ意識が飛んだ。

「もしかしてあの男………私に気づきましたかねえ?」

私は凄惨な死体が二つ出来た場所から、だいたい1kmほど離れたビルの10階にいる。

ここには爆発があつてからすぐに付きましたが、少し出遅れた感が否めません。

この場所からスコープ付きのスナイパーライフルで狙い打ったのに気付く訳がありませんが、もし気づいたのならば相当カンの言い方ですね。

煙で視界が悪く、この状況下で察知するのは並大抵の事ではありません。

まあ死んでしまったので関係ありませんけど………

「そういえばシュウに連絡をしておいたほうが良いでしょうか？一応命の危機があったことを言っておくべきでしょうか？」

そう考えた矢先だった、シュウの後ろにはまた3人ほど兵士が現れた。

シュウはいのりに目がいつていてまったく気づいていないようだった。

「世話が焼けますね……」

再びスナイパーライフルを構え、照準器で狙いを付け引き金を引く。この距離であればスポッターは不要であり、オートマチックタイプ（自動装填）一のライフルなので連射可能、兵士を一掃できます。この様子ですと秘密兵器は必要なかったみたいですね……

・

周りを気にしつつ、シュウといのりの様子を窺う、近くには兵士はいないので一先ず安心、そう思った矢先、いのりの進行方向に2体のエンドレイヴを確認した。

まずい！！

私は急いで強制回線を使いシュウに連絡を入れる。

「シュウ！！いのりを止めなさい！！」

「え！？アイスマンさん一体どこに！？」

シュウは急に入った連絡に驚きを隠せないようだった。

「そんな事は後です！！いのりを止めなさい！！」

私は叫ぶ、しかし遅かった。

2体のエンドレイヴはいのりに気づき大型の銃をいのりに向ける。

私は無駄だと思いつつも、虎の子である秘密兵器、『イーグル・アイ』を装備する。

装備といつてもただ眼鏡型の装置を眼鏡と同じように装着するだけです、効果は絶大。

視力を大幅に上げ、目では視認できない物の体温、風の動きを感知する。

そしてこのイーグル・アイの本領でもある動体視力の大幅な上昇、

ですがこんな物を使ってもエンドレイヴの破壊は不可能です。

しかし、少しでも時間稼ぎになれば・・・・・・・・

そう思い、エンドレイヴの装甲が薄そうな関節部分を狙い、引き金を引き続ける。

私は今心底後悔しています、ジャックにはイーグルアイではなく対戦車ライフルを用意していただくべきでした。

こちらから見るに、シュウは全力で走りいのりの元に走っています。

「つく！！間に合え・・・・・・・・」

ライフルを持つ手が汗で濡れ、震えが止まりません。

あと少し・・・・・・・・あと少し・・・・・・・・

シュウがいのりの元にたどり着き抱きとめる、その瞬間、エンドレイヴは今にでも引き金を引きそうになった。

二人は死んだ、そう心の片隅で感じたその瞬間、シュウといのりの周りに火の粉とは違う赤い小さな光が飛んだ。

それだけではない、シュウの足元には光の陣のようなものが発行し、水銀のような銀色の物質が辺りを揺らめきました。

「あれはまさか・・・・・・・・」

シュウはいのりの胸に腕を差し込み、細長い水晶の塊のような物を取り出すと、中から剣のようなものが現れた。

「王の・・・・・・・・能力ちから」

空は開け光、見る物の心を奪う美しさを持っていた。

私とその光に目を奪われていると、エンドレイヴは後退しミサイルを射出した。

シュウは剣を突きだすと陣が出現し、ミサイルを反らす。

次の瞬間、シュウは走り出すと剣を使い、エンドレイヴの腕を切り落とした。

すさまじい戦闘力、今頃フィールドバックを受けた人間と他の技術者たちはこの異常な事態に驚いている事でしょう。

さすがの私もここにいと巻き添えを食らってしまいそうで恐ろしいです。

私はイーグル・アイを外し、ポケットにしまうとライフルの弾装を抜きカバンにしまう。

急いでビルを階段を駆け下りシュウとエンドレイヴの戦闘を1分ほど見つめる。

シュウはエンドレイヴのミサイルを避け、切り裂き、そして吹き飛ばす。

かなり善戦しているようなので私の手助けは必要なさそうですね。

私はシュウに背を向け歩きだす、そろそろ帰ってもいいかもれませんかね。

我が家に・・・・・・・・



## 第6話 スナイパーの仕事（後書き）

そろそろ次郎の家出が終わり、次郎の消えた真の理由が明かされます。

ちなみに真の理由は後付け設定です。

それとご要望がありませんでしたが、次郎の設定をのせておきます。

感想、誤字脱字の指摘、悪い点がございましたらよろしく願います。

## 第7話 次郎の真意（前書き）

遅くなりましたが投稿します。  
今回はほぼ会話です。

## 第7話 次郎の真意

「ガイ、私ちゃんとできた？」

赤く、前が開いた服を着た少女、いのりは心配そうにガイに問いかけた。

「いや、お前には失望した、いのり」

しかしながら、金髪の青年ガイはいのりに厳しい言葉を言い放つ。いのりはその言葉にハッと息をのみ、悲しげな表情を見せる。

その状況を見るに見かねた少年、幸の薄そうなシュウはガイに話しかける。

「あの、酷いんじゃないんですか？口挟むのもなんですけど……  
・・彼女！すごく頑張ってた！酷いけがまでして……」

「知っている」

だが、ガイはシュウの言葉に冷たく返す。

「結果がすべてだ、あいつは最後に大きなへマをした」

「へマ……？一体何を？」

「お前にヴォイドゲノムを使わせた事だ」

その言葉にシュウは覚えがあつた。

「あのシリンダー……アイスマンさんから預かった……」

「あれは本来、俺が使はずの物だった……」

ガイの言葉にシュウは驚きを隠せなかった。

シュウはあのシリンダーはアイスマンの物だと思っていたからだ、アイスマンはいのりを助ける切り札と言っていたために、つい使ってしまったが……

「お前に預けたシリンダーはセフィラゲノミクスが三機のみ培養に成功した強化ゲノムだった、使用者に付与される力は王の能力」

「王の能力……」

「ヒトゲノムのイントロンコードを解析し、そのうちに隠された力

をヴォイドに変えて引き出す事が出来る」

「ヴォイドって……？」

「形相を獲得したアイデア、お前が使ったあの剣の事だ」

シュウは、いのりから取り出した武器をふと思い出した。

凄まじい能力を扱う兵器、シュウはそれに恐怖感を感じた。

「あれはいのりのヴォイド、別の人間からはまた別のヴォイドが引き出せる、神の領域を暴くヴォイドテクノロジーの頂点、それがお前の手にしたものだ」

「え？」

「もう昨日までのお前のように、無力に立ち止まり見過ごすことは許されない、お前にも戦ってもらう」

「そんな！！いきなり……」

その言葉を言った瞬間、ガイはシュウに近寄ってくる。

シュウは本能的にのけ反る、何をされるか分かったのだろう。

ガイがシュウの首下を掴もうとした瞬間だった、ガイのその手は何者かに弾かれた。

「ガイ、その嫉妬は情けないですよ、まるでおもちゃを横取りされた子供のようです」

その男は銀のトランクケースを片手に、黒いズボンとワイシャツを汚して浮浪者の服装で現れた、唯一浮浪者でないという決め手は背中に担いだスナイパーライフルであろう。

「アイスマンさん！？」

「なっ！？氷野樫！！」

「ジロウ……」

三人は一人の人間をすべて別の名前と呼んだ。

「みなさんお揃いで楽しそうですね」

氷野樫はニコリと笑うが場の空気は一気に凍りついた。

おかしいですね、笑顔でやってきたというのに場が凍りつくとはどういう事でしょう？

「アイスマンさん！一体どこに行っていたんだですか！！ピンチになったら助けてくれるって言ったじゃないですか！」

「勿論助けましたよ、命がけの援護をしました但気が付きませんでしたか？」

自分の場所が知られてしまう事にも厭わずに、エンドレイヴに銃弾を叩きこんだ私を褒めて欲しかったぐらいです。

「そうなんですか・・・？」

「ええ、ビルからこそそと撃っていましたよ、勿論シュウの有志もしっかりと見させていただきました」

「あのありがとうございます」

「氷野樫！お前は一体どういつもりだ！！」

ガイは私の首下を掴み叫ぶ。

「数少ない服が伸びてしまうので話してほしいのですが・・・」

「そんな事はどうでもいい、お前の本心を今！！ここで言え！！」

ガイはなぜ熱くなっているのでしょうか？いえ、これは熱くなるというより焦りでしょうか、大事なヴォイドゲノムがシュウに使われてしまい困っているのでしょうか。

「私の本心なんてガイが知ってどうするのですか？」

「次郎！！貴様！！」

ガイは堪忍袋の緒が切れたと言わんばかりに拳を振るおうとしますが、しかしそれは叶いません、ただ殴られるのは癪ですしね。

「ガイ、今のあなたに私は負けません」

第一にこの近距離で大振りのパンチが当たるのは2流がいいところです。

やっぱり相当頭に来ているんですね。

私はガイの右手をいなすと、ガイの体に脇を密着させた。

「なっ!？」

ガイは驚きの声を上げますが、私が何をしようとしているのかすぐに分かったでしょう。

そう、投げ技です。

「そお~~~~れっ!」

背負い投げをして、地面に叩きつける様に落とす。

投げ技は地面が固ければ固いほど効果が増しますから、床がコンクリートのこの場所でやれば相当痛いでしょう、骨の一本ぐらいはヒビが入りましたかね？

「あの……アイスマンさん？氷野樫とか次郎とか呼ばれていますけど……お知り合いですか？」

シユウは状況が掴めないように私に質問してくる。

しかしその問いに答えたのは私ではなくいのりでした。

「その人は氷野樫 次郎、私たち葬儀社のメンバー」

「え……?」

酷く驚いた表情をするシユウ。私としては、ネタばれは遅いほうが良かったのですが。

「いのり、一つ訂正させてください、今は元葬儀社です」

「そんな事はどうでもいい!なぜ桜満 集にヴォイドゲノムを預けた!」

ガイは私を振り払い立ち上がり、怒りを露わにする。

「この世の全て物はあるべき場所に収まるべきです、何も問題はありませんよ」

ガイは私の言葉に何も言い返さない、そして多少の間を経て何か言おうと口を開こうとした時だった。

ピピピピピと言う乾いた機械音が辺りに響いた、恐らくガイの端末が発している音でしょう。

「あの……鳴ってますよ?」

シユウは恐る恐るガイに話しかける。

「チッ……分かつている」

それだけ言つとガイは端末の通信をオンにした。

「ヤベエ事になったぞガイ、14区画の地下駐車場に白服どもが突入しやがった」

おや、この声はアルゴのようですが、地下駐車場に白服が突入とは一体……

「地下駐車場？」

「誰かが安全だつて言いだして、避難していた100人近くが一気に捕まっちまった、それにアヤセを食った奴は皆殺しのダリルだ、ちよつとめんどくせえぞ」

ダリルですか……確か金髪の坊やだった気がしますね、姿はあまり見た事ありませんが親の権力を笠にきて好き放題やっているとか……

「ダリル……あの万華鏡か」

ガイは不敵な笑みを浮かべた。

「最近よく聞く名前ですね、ガイ、あなたはどうしますか？」

私がガイに話しかけると、通信中の相手、アルゴにも聞こえていたようだった。

「氷野櫂さん！？戻ってきたんですか！！」

「いえ、まだ帰るつもりはありません」

それだけ言つと私は通信を無理やり切った。

「氷野櫂、どういふつもりだ？」

「事情があるんですよ、シュウ、あなたは一先ずガイの指示に従いなさい」

「え……？」

今まで蚊帳の外だった二人を呼ぶ、シュウは本当に状況が理解できていないようですが……

「これでやつと……一仕事終えます」

嬉しいのはいいのりだけではありませんがね。

## 第7話 次郎の真意（後書き）

誤字脱字、感想等がありましたら、よろしく願います。



## 第8話 帰還（仮）（前書き）

遅れながらも投稿させていただきました。

まったく話は進まず、読みにくい点があるかと思しますので、ご指摘のほうよろしく願います。

設定を少し追加しておきました。

## 第8話 帰還（仮）

私は今、葬儀社の本部にいます。

実をいうとあの後ガイたちを振り切ってきました。

私の計画がばれてしまうと後々面倒だからです、心苦しいですがまだ皆さんにはつらい思いをして貰いましょう。

そんなこんなで、やっと私の部屋の前につきました、案外葬儀社のメンバーに会わない物ですね、抜け道を使ってきたからでしょうか？そんな事を考えつつ、私は自分の部屋に入る。部屋に入ると思ったよりも綺麗になっています、多分誰かが掃除してくれたのでしょうか、アルゴが汚したカーペットはシミ一つなく、部屋は埃一つありません。

「掃除してくれるのはありがたいですが、部屋の配置は変わっていませんよね？」

アヤセに部屋の物は好きにしていいいなんて言いましたが、今更になって少し後悔です。

数分部屋を見回してみますが、特に問題はないようです。

ベッドの上に荷物を置いて、ベッドの下に置いてある物を引っ張り出します。

それは縦1.5m、横80cmの鋼鉄のトランクで中をさっそく確認します。

蓋の端にあるボタンを押すとパスワードを打ち込む機器が現れます。

「たしか……パスワードは……『Zirou』」  
打ち込んでみるが開きません、この箱は一度しか開けていませんのでパスワードを忘れてしまったようです。10分ほど色々なパスワード打ち込んでみますが反応はありません。

さすがにイライラしてきました。これで80回目の入力です、打ち込むのが『sougisya』

「……………」

反応はありません、これでもないようです。叩けば開きませんか？  
試しに一回だけ……等と思いますが、手が痛いのは勘弁で  
す。

しかし、そうするともう成す術がなくなります。

仮に機械で切断して開けようとしたりすると火花が散って、中身に  
引火してドカンですし、そんな物を使う余裕も時間ありませんし。  
いつその事、これを開けなくてもいいのでは？と言う考えも頭を掠  
めますが、中の装備なしでは人質を助けられる気がしませんし。

次に案を考えているその時でした。

唐突に、一切の前触れもなく私の脳から目にかけ激痛が走る。

「なっ！？……ガッ……グウッ！

！……」

とうとう来ましたか！！

痛みに耐えきれなくなり地面に倒れ悶え、痛いと言う感覚以外が消  
えうせる。

汗は噴き出し涙が頬を伝い涎を垂らす、目の前は赤く染まり意識が  
少しずつだが遠のいてゆく。

だが……意識を飛ばすわけにはいきません。

しかし、私の気持ちとは裏腹にどんどん痛みは増してゆく。

「つくう……あ、あああああああああ

あああ！！！！！！！！」

ケモノのような呻き声を上げると同時に、痛みは少しずつ着実に痛  
みはひいて行った。

しかしすぐには動けず体から汗が伝う嫌な感覚を感じ、そのまま  
眠りについてしまいそうになります。

普段ならそうしたでしょうが今はそんな暇はありません、とりあ  
えず着替えをしなければ……

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……  
……」

壁を支えにゆっくりと進んでいき着替えが入っているタンスを開け

まず、シャツを乱暴に脱ぎ捨てると、タンスの中から適当に服一式を引きずり出します。

しかし、体はベトベト、一先ずシャワーですね・・・・・・・・・・

~~~~~入浴中~~~~~

入浴後、葬儀社のズボンに黒いＴシャツを着て一息つきます。

とりあえず水が飲みたいですが、そう思い冷蔵庫を開けます。

すると、中に入っていたのは大量のプリンでした、数は多分30は超えているでしょう。

きつと罪滅ぼしのつもりですかね？

私はペットボトルの水500mlを一息に飲み干すと、台所に置いてあるスプーンを持ち早速プリンの蓋を開けて食べます。

味は悪くありません、これはスーパーの市販品ではなく洋菓子店のプリンでしょうか？

すぐに一つ目を食べ終わり、すぐさま二つ目、三つ目のプリンを食べて行きます。

やはり入浴後はプリンが一番ですね。

「・・・・・・・・・・プリン？」

そう言えばパスワードは・・・・・・・・・・

試しに『Putch in Pudding』と入力します。

久しぶりに食べたプリンを見て思い出しました。そう言えば数年前に食べたブッチンプリンのあまりの不味さに激怒した覚えがあります、この鋼鉄のトランクは同時期に購入したものですし。

すると、機械音が流れ見事にトランクは開きました、我ながらアホなパスワードにした物です。もう少し考えてパスワードは決めるべきですね。

そんな事を考えつつ、中身を確認します。

中身は大きめの茶色いコート、催涙効果付きのスモークグレネードが7つ、サイレンサー付きのサブマシンガンとハンドガンにスタングレネード7つ、ほか弾装多数……

私は体中に武装を施していきます。

まず体にガンベルトを装着しハンドガンを仕舞い込みます、その上に茶色いコートを着てコートの内側にはグレネードをしまつとポケットに弾丸を入れます。

そして最後に秘密兵器2と3も……それらを装備終了すると荷物を背負い部屋を出ます。

そつとドアから顔を出し左右確認、

「右見て……左見て……もう一度右見て……」

人っ子一人いません、そう言えば先ほどシャワーを浴びていたら歓声が聞こえましたが、ガイは演説でもしていたのでしょうかね、そんな事を考えつつ、廊下を進もうとした瞬間、誰かに声をかけられました。

「どこにいくんだ？そろそろ作戦が開始される」

「いえ、ちよつとトイレに……」

「氷野櫂、お前はトイレに戦争でもしかけるつもりか？カバンからのぞいているのはスナイパーライフルじゃないのか？」

さすがに逃げられませんか、そこまで甘くはありませんでしたね。

「ガイ、もしかして最初から気づいていました？」

振り返るとそこにはあきれた顔をしたガイがいた。一人だけのだ。

「もしかしくなくてもだ、お前の行動は全てツグミが監視していた」「部屋の中ですか？」

さすがに私の部屋の状態を見られてしまうのは困りますね、まだアレの事は誰にも知られたくないので……

「いや、さすがにそこまではしない、部屋から出る所を捕まえればいい話だからな」

「そうですか、ですが私は行かなくてははいけません、人質になった皆さんを助けなくてははいけませんから」

「それなら俺たちと」

「それは無理です」

私は即答した、これ以上この場に留まると私の作戦に支障をきたしますね。

申し訳ありませんがガイの目を少しの間封じさせて頂きましょう。

「ガイ、実は私は氷野櫨 次郎が本名ではないのですよ」

「なに？」

そう言いながらガイに少しずつ近づいていく、さりげなくポケットに手を入れ秘密兵器2を握る、ガイは身構えますが反応が少し遅いですね。

「本名は」

話しかけつつノーモーションでガイに接近しポケットの中の秘密兵器2を取り出し吹き掛ける。

「な！？くそ！！」

ガイは目を押さえますが時すでに遅いです。私が今使用したのは秘密兵器2『ワサビスプレー』です。

ワサビエキスを濃縮し粘度を高めていますので最低でも10分は苦しみます。

現にガイは悶え苦しんでいますし、これは成功ですね。

「ガイ、いつでも油断は禁物ですよ、ああ、それと先ほどの名前の件は全くのウソです、では明後日辺りに会いましょう」

そう言つて私は葬儀社の本部を走った、多分ツグミが監視しているかもしれないし、急いだほうが得策です。

数分も走ると外に出て、近くのビルに逃げ込みます。

ゴミやらなんやら散乱していますが長居しませんのであまり気にしません。

私はカバンの中に入っている通信機器を取り出し耳に装着すると、GHQ、葬儀社の通信をいつでも拾える状態にして準備完了です。

さあ、ミッションスタートです。

第8話 帰還（仮）（後書き）

明日から冬休みなのでなるべく早く投稿して行きます。

第9話 アンチボデイズ（前書き）

今回は氷野櫨は一言しか喋りません。

第9話 アンチボディース

桜満 集は現在ダクトの中を移動していた。うす暗く狭いのでほふく前進しながらの移動を強いられているが問題はそこではない。

一緒に行動しているいのりが前にいるのだが、いのりは現在次郎にも怒られた例の『前ががばつと開いた服』を着ているのだ。一応上には葬儀社のジャケットを着ている物のズボンは履いていない。必然的にシユウの目の前にはいのりのヒップがある訳だ。

しかしシユウは健全なる男である以前に性根が優しく清らかな青年である。

そんな彼が目の中の光景を凝視できるはずもなく目を反らす。

だが、それが原因とも言うべきか、シユウは嫌な物を見てしまった。ダクトの小さな通風口の間から見えた物、それはGHQの兵士である、アンチボディースが人質に暴行をしている姿だった。

座っていた人質の首を掴み持ち上げ、銃口を差し向け、

「無駄な抵抗を！！吐け！！リーダーは誰だ！！言え！！」

シユウはその姿に衝撃を受けた、そして同時に自分が今助けてあげる事の出来ない自分に対し、無力感も感じていた。

自分が王の力を使えば助ける事が出来る、しかしそんな事をするともっと多くの人たちを助ける事が出来なくなる。

葛藤だった。

しかし、いつでも、どこにでもいるものだ、主人公を助ける仲間が・
・・・・

シユウの付けている通信機にザザッとノイズが走り声が聞こえた。

「シユウ、あなたは前だけを見なさい」

シユウは氷野櫛のメッセージを聞いた、その瞬間だった。

人質に暴行を加えていた兵隊は頭から血を流し倒れていた。

ほかの兵士が何事かと状況確認をしようと周りを見ている瞬間にも、一人、また一人と倒れて行く。

「シュウ、もしかして……………」

「ああ、氷野櫛さんだ……………」

兵士は物の10数秒で全滅してしまった。恐らく銃撃をしたのだから音が全くなかった事を鑑みるに、サイレンサーでも装着していたのだろう。

シュウは氷野櫛さんの凄さを実感すると同時に恐怖感も感じていた。しかし、立ち止まってなどいられない、早く先に進まなくては……………

シュウはいのりとともにダクトを進んでいった。

ちなみに、そんな使命感を感じつつも目のやり場に困るシュウであった。

六本木の元大通りである場所は今、殺伐とした雰囲気包まれていた。

大量の兵士が人質を囲み、今にも撃ち殺そうと銃を構えている。そこには抗議する子どもをつれた女性の姿も見え、今にも女性の夫が殺されそうになっているの事を察する事が出来る。

「やめてください！！夫が何をしたって言うんですか！！」

女性はGHQの兵士に縋りつき懇願する、子供がトイレに行きたいと女性に言うが女性は子供を不安にさせないようにいつも通りに振舞おうとしている。

しかし、それが見るものは痛々しさを感じた。

「その人病気じゃありません！！お願いします！！」

しかし、女性も懇願にも聞く耳を持たずGHQの兵士たちは何も答えない。

その時だった、女性の目に一人の男が目に見えた。

金髪で、ピッチリとしたスーツを着込み白い一輪の花を持った男だ、見るからに好青年といった風情で、花の香りを楽しんでいたこの場では一番話の分かる人間と思えた。

しかも、この場所にいると言う事は軍人なのだろう。

そして、一言。

「切ない光景だね．．．．．胸が震えるよ．．．．．」

あたかもこの状況を悲しんでいるような物言いだ。

女性は一縷の望みを賭け、その男に縋りついた。

「軍人さん！！助けてください！！お願いです！！」

女性は縋りつくと同時に、男の持っていた花びらが散ってしまった。

男はその散った花を屈託ない少年のような瞳で見つめていた、

しかし、その瞬間男の態度は急変した。

顔を醜く歪ませ女性を振り払い叫んだ。

「何をすんじやクソアマアツ！！！」

そして腹部を蹴りつけ、さらに地面に倒れこんだ女性の顔を足蹴にした。

「菌がうつるだろうがあっ！！」

さらに蹴りを加え続け辺りに血飛沫が待った。

そして、その映像を見ている人間は数人いた、いのりとシュウ、そしてグエン少佐とオペレーターである。

グエン少佐はその映像を見て何も感じてはいなかった、感じたことと言えば金髪の青年、ダリルが気に食わないといったただけだろう。

グエンは部下に命じた。

「フツ．．．．．やりたまえ、奴らを殺せ！！」

しかしグエンは一つ重大なミスを犯していた、目の前の任務に集中しすぎて兵士からの定期連絡がこない事を気にも留めていなかったのである。

その時ダリルはハンドガンの鋼管をスライドさせ女性に標準を合わせる。

周りの兵士たちも同じように人質に銃を向けた。

この時葬儀社メンバーは相当焦っていた。チームは未だに配置につけず、いのりとシユウはまだ待機の指示を受けていない。

葬儀社メンバーと人質達の緊張感は最高潮に達した。

ダリルが引き金を引く瞬間、葬儀社メンバー全員に同一人物からの通信が入った。

一瞬のノイズの後、一言だけだが、なつかしい声が聞こえた。

『援護します』

次に聞こえたのは金属の塊が大量に転がる音だった。

それはダリルと兵士たちの足元に転がり下を見る。円柱の形で素材は鉄、ダリルはそれを拾おうとした瞬間だった。円柱の鉄から穴の開いた棒が飛び出し、そこから大量の白いガスが噴出した。

「なに！？」

そのガスをもろに受けてしまったダリルは目と鼻、のどに強い刺激を感じた。

この時ダリルは、この刺激は昔食べた日本の料理に入っていた『わさび』に似ていると走馬灯のように思い出していた。

他の兵士はなんとか目は防護していたが、目と鼻はそういう訳にはいかない。

鼻はツンツと痛み、のどはイガイガと痛む。

だが、次の瞬間兵士たちはその痛みを感じる事はなくなった。白い闇の中、次々に首を切られ倒れて行ったからだ。

「クソオツ！！クソオツ！！」

目、鼻、のどに凄まじい痛みを感じながらも、エンドレイヴの操縦席があるトレーラーに駆け込んだ。

この時、やっとチームは所定の場所に到着し、ガイは作戦を開始、大量のミサイルを射出させた。

ダリルは鼻水と涙を流しつつエンドレイヴを起動、発進させる。

何とも締まらない光景である。

第9話 アンチボデイズ（後書き）

誤字脱字、感想、よく分からない点がありましたらご指摘ください

第10話 居場所（前書き）

なんとか完成しました、分かりにくい文面、誤字脱字、感想、要望
がございましたらご意見お願いします。

第10話 居場所

元六本木の地下奥深く、地上ではちょうどガイたちの作戦が決行されている時、4人の男たちは取引を交わしていた。

4人のうち3人は葬儀社のメンバー、仮に坊主頭の男のをボウズ、パーカーを着ているのはパーカー、茶色い髪のはチャパツと呼称しよう。

そして3人の取引相手はGHQの兵士だ、兵士はボウズに茶色い封筒を渡した。

「ちゃんと150万入ってるんだろうな……」

ボウズは封筒の中身を出し確認を始め、手慣れた手つきで金額を数え始めた。

実はこの3人、すでに前金として半分の150万を受け取っている。その対価はGHQに葬儀社の情報を流すこと、数年しか葬儀社にいなかった3人にとっては葬儀社そのものに愛着などなく、計300万、情報を流すだけで一人頭100万という金額はあまりにもウマイ話であった。

もちろんGHQにも利点があり、たった300万で情報を得られるとすれば、いたずらに兵士を消費することなく、300万で情報を買うと言うのは安い買い物であった。

「私はもう行く、上ではすでにお前らのお仲間を捕まえているはずなのでな、早く本隊と合流しないとまずい」

兵士はそう言うと、足早に去って行った。

ボウズは兵士に気にも留めずに金勘定をしている、ほぼ金額の計算は終わっているので問題はなかった。

ボウズは兵士が去った数10秒後、封筒に150万入っている事を確認し、パーカーとチャパツに50万ずつ渡した。

「へへッ、少し情報を渡すだけで一人100万、こんなにうまい話はねえな」

チャパツは降つて湧いた金に頬が緩むのを隠せなかった、一方パーカーはと言うと受け取った金を無造作にポケットに仕舞い込み、二人に背を向け去ろうとする。

「オイ、これから飯を食いに行くけどお前はいかねえのかよ」

「いい」

それだけ言つてパーカー去ろうとした。

「ツチ、付き合い悪い野郎だぜ」

チャパツは悪態をつくがボウズがそれをたしなめる。

「いいじゃねえか、あいつはいつもあんな感じだろ」

パーカーは悪態を聞きつつ、これからについて計画を考えていた。これ以上この国にいるのは危険だと感じ、国外逃亡をしようと思つていた。

しかし、全てが遅かった。

「あまり見えない顔ですが、皆さんは葬儀社の新人りですか？」

唐突に声が聞こえた。3人は坂の上を見ると一人の男がこちらを見ている。

GHQの人間ではない、しかしどこかで見た事がある、チャパツとボウズは考えていた。

だが答えはすぐに出た、その正体をパーカーが知っていたからだ。

「氷野樫さん……ですよね？」

その名を聞いて二人は戦慄した、二人はあまり氷野樫 次郎の事を知らないがパーカーは知っていた。

ナイフの名人でもあるアルゴを育て上げ、参謀である四分儀並みの判断力を持ち、葬儀社のリーダーであるガイも絶対の信頼を寄せている人物だ。

まともにやりあつて対抗できる人間ではない、しかし今の話は聞かれていないかもしれない、パーカーは内心心臓が止まりそうな心持で氷野樫から話しかけてきた。

「あなた方はここでなにを？」

氷野樫の質問にパーカーは冷静に答えた、後ろの二人に喋らせたら

うつかりボ口を出すかもしれないと考えたからだ。

「俺たちはガイさんに隠れてるって言われました、まだ葬儀社に入
って間もないんで……」

パーカーの言葉にチャパツとボウズも便乗してきた。

「そうなんすよっ！！ガイさんが俺らに気を使って！！」

「本当は作戦に参加したかったんですけど……」

氷野櫛は顔に笑みを浮かべたままだった、何も答えない。

チャパツとボウズは沈黙に耐えきれずに薄ら笑いをするが、その笑
い声は虚空に消えて行った。その後、嫌な沈黙が流れる。

その沈黙に耐えきれなかったのか、パーカーは氷野櫛に質問をした。

「氷野櫛さんここで何を？確か葬儀社を抜けて二度と戻らない
と聞きましたか？」

「ええ、確かに言いましたけどあれは一時の気の迷いだったんです
よ、今日にでもガイに戻りたいと言おうと思ひましてね」

氷野櫛は笑みを崩さない、まるでその目は全てを見通していると言
わんばかりだった。

「じゃあ今からガイさんの所に行くんですね！？なら早く言ったほ
うがいいですよ！！」

「いえ、その前に一つ仕事がありまして……」

氷野櫛の目つきが変わった、その目は鋭く開かれ殺気を飛ばしてい
る。

チャパツとボウズは裏切りがバレたと確信して、支給されていたハ
ンドガンを構えた、射線上にはパーカーがいたが構わずに引き金を
引こうとする。

しかし引き金は永遠にひかれる事はなかった。チャパツとボウズは
体に痺れを感じハンドガンを落とし、膝について倒れた。

「体が……」

「なんだこれ……」

チャパツとボウズは自分の身に何が起きたか理解出ていない、しか
も二人にはゆっくりと睡魔が襲い掛かり、眠りに落ちる。

「氷野櫛さん・・・・・・・・これは？」

パーカーは恐怖感を感じながらもなけなしの勇気を振り絞り聞いた。
「遅行性のスタンガス、催眠付きです、空気より重いので下にたまるんですよ」

パーカーはなぜ自分と氷野櫛が倒れないのか分かった、

「俺を・・・・・・・・殺すんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・もちろんです」

氷野櫛の言葉を聞いた瞬間、腹部に鋭い電流が走った、腹部を見ると氷野櫛がスタンガンを押し当てているのを確認し、意識は闇に落ちた。

俺は体中に痺れを感じ目が覚めた、しかし体は動かない。

体を見ると体が鎖で椅子に固定され身動きが取れないようになっていた。左にはボウズとパーカーが同じような様だったが、まだ目が覚めていないようだった。

「オイ！！お前ら起きろ！！」

だがまだ目を覚まさない、死んでいるのかと錯覚を起こしたか、二人は眉を顰めゆっくりと目を覚ました。

「あれ・・・・・・・・俺は一体・・・・？」

「ここは・・・・・・・・」

ボウズとパーカーはボウツとしていて、状況はまったく把握できていないようだった。

「しっかりしろ！！俺らはあの氷野櫛って野郎に捕まったんだよ！

！」

口に出して言ったが今だに信じたくはなかった。

アイツは確実に俺たちを裏切り者だと確信していた、このままだと確実に殺される。

どうにかして鎖を外そうと体を動かすが、ビクともしない。

その時だった、近くで足音が聞こえ、少しずつこちらに近づいてきているようだった。

そして暗がりの中から、俺たちを捕まえた張本人、氷野慥 次郎が現れた。

「目が覚めたようですね」

抑揚のない声で俺たちに話しかけてくるその姿は不気味だった、顔には表情が泣く右手にはハンドガンを持っていた。

「あんた……俺たちを殺す気か!!」

ボウズは大きな声で叫ぶが答えない。

氷野慥はハンドガンの鋼管を引き、ボウズの頭に銃口を付けた。

「あなた方以外に裏切り者は？」

驚くべきほど冷淡な声だった、ボウズは恐怖感で体を震わせ顔を真っ青にしていた。

「あの……何も……」

ボウズは恐怖のあまりうまく言葉に出来ないようだ。

氷野慥はボウズを銃口から反らし今度はパーカーに向けた。

「あなたは？」

しかしパーカーは静かに首を横に振った。こいつも恐怖のあまり声も出ない。

すると必然的に次に来るのは俺だった。

「ではあなたは？」

俺は全力で首を横に振った、体中から冷たい汗が流れ出てそれが恐怖感を煽った。

すると氷野慥は何の躊躇いもなくボウズの頭を撃ち抜き、続けてパーカーの頭も撃った。

そしてそのまま俺の頭に銃口を向け引き金を引いた。

「ひい!!」

しかし、銃弾は俺の頭を破壊することなく、カチンツと冷たい金属音がしただけだった。

「弾切れですか」

短くそう言うと、ハンドガンの弾装を取り出し、一発ずつ弾を込め始めた。

氷野樫が俺たちを撃ったのは唐突だった、前置きはまったくなくアメリカの映画のように、撃たれる前の長ったらしい口上はない。となりを見ると二人は額に数センチの丸い穴を作り、そこから血を流して死んでいた。

目は開き恐怖の瞬間をそのまま切り取ったようだった。

「頼む！！見逃してくれ！！俺たち以外に裏切り者は知らない！！本当だあ！！」

俺はみじめにも命乞いをした。涙と鼻水、そして涎を垂らし懇願した。

絶対に死にたくない、うまい飯も食いた、いい女も抱きたい、贅の限りを尽くしたい。

しかもまだ人生の三分の一も生きてねえ！！

だが氷野樫はこちらを見ず、弾装に銃弾を込めながら言った。

「見逃してほしいですか？」

氷野樫は唐突に言った、

「あ・・・？ああ！！死にたくねえ！！頼む！！なんでもするか命だけは！！」

助かる、一瞬だけ考えた幻想だった。

しかし俺は氷野樫に蹴られ冷たいコンクリートの床に倒れた。

「あなた方がGHQに情報を売ったせいで、何人もの人が死にました、私の力が足りないばかりに目の前で、今のあなたと同じことを言っただけで死んだ人が数多くいました」

「すいません！！反省しますから　　ウゴツ！？」

最後まで言えなかった、口に銃口を突っ込まれ口を塞がれた。

「悔い改めよとも、反省しろとも、後悔しろともいいません、ただ死になさい」

今まで無表情だった氷野樫の顔が一瞬歪み泣いているように見えた、

そして言葉を最後に、俺は永遠に眠りについた。

日が落ち始め辺りがオレンジ色に染まりはじめる。作戦は成功に終わりG H Qは撤退し、一息ついた時、俺はシュウを葬儀社に勧誘した。

「来い、シュウ、俺たちとともに、お前にはやれる事があるはずだ」俺は皆が見ている前でシュウに手を伸ばした、シュウの顔は少し驚いた後俺を見て言った。

「いや、僕は普通の生活に戻るよ」

そう、それは少し予想外の返答だった、だが予想が出来ない言葉ではなかった。

「そうか………残念だ」

以外にもシュウを誘うには根気がいるようだ。そう思い残念そうに目をつむり、シュウに差し出した手を下げようとした。

その瞬間、誰かが手を掴んだ。勿論シュウではない、目を開けるとそこには一人の男が立っていた。

「何をしている？」

「いえ、上げたその手が寂しそうだものでつい、いけませんでした？」

その男、氷野 次郎は愛嬌たっぷりの顔で言った、何とも憎めない顔でそこにいた。

「いや、よく帰ってきた、お前の仕事とやらは終わったのか？」

そう言うと、少し悲しそうな顔をしていた。しかしその顔は一瞬で消えいつも通りの不敵に笑う顔に戻った。

「ええ、終わりましたよ」

「そうか・・・・・・・・仕事は多いぞ」
俺は次郎と固い握手を交わし、やっと心の底から一息つけたそんな
思いがした。

第11話 至高の黄色 後悔の花（前書き）

後半はシリアスになっていると思います。

誤字脱字、分かりにくい点、感想がございましたらよろしく願います。

第11話 至高の黄色 後悔の花

俺たちは淘汰される者に創造の歌を送り続ける
故に葬儀社

俺たちは抗う

この国を我が物顔で支配するGHQ

俺たちは戦う

俺たちを淘汰しようとする全ての者と

この言葉が世界に発信されてから世間は騒がしくなりました。

ニュースでは連日ガイの気取った顔が放送され、葬儀社よりもガイが記憶に残ります。

ソファアーに座りながら何度も見ているのですが、映像に写っているガイの顔の角度、あれは一体何なのでしょう？自分が一番力ツコよく見える角度なのでしょうか………

「シュウはどう思います？」

そこで私は目の前にいるシュウに話しかけました。

「そんな事より！！なんであなたがここにいますか！？ソファアーとテーブル、それに冷蔵庫まで持ち込んで！！葬儀社に帰ればいいじゃないですか！！」

シュウは顔を真っ赤にして怒りだしました。

「シュウ、私との契約忘れていませんか？一つは私について詳しく詮索しないこと、二つ目はこの場所を私の寝床として貸していただくこと、三つ目は三食暖かくおいしい食事を私に提供し三食のデザートを付けること」

「そうですけど………でも、本名を聞くぐらいはいいですよ？いろんな名前と呼ばれていましたし………」

まあ、そのくらいなら問題ないでしょう。

「そのくらいなら構いません、勿論ですがアイスマンは本名ではあ

りません、アイスマンと言うのはとある映画からとった偽名です、私の本名は氷野櫨 次郎、これが本名です」

「氷野櫨さん、聞きたい事があります」

「次郎で結構ですよ」

「次郎さん、あなたは葬儀社のメンバーなんですよね？」

「詮索禁止です」

そんな私の言葉を聞いてシユウは不服そうな顔をする。

「そんな・・・・・・・・・・」

「冗談です、質問には答えてもいいですけど・・・・・・・・・・急がないと学校に遅刻するのでは？」

私はシユウに時計を見せる。

「もうこんな時間！？次郎さん弁当置いておきますから！！夜にまた来ます！！」

そう言うのと慌ただしく廃墟兼自宅兼シユウの秘密基地を出て言った。私の目の前に置かれたのは、見覚えのあるナプキンに包まれた弁当二つと赤い巾着袋。

この巾着袋は一体？

中を確認するとそこには2つのプリンが入っていました！！！！

ただのプリンではありません！！洋菓子店「NOITAMINA」で限定10個しか作られない限定濃厚プリン、『レガリア』

このプリンはその辺のコンビニやスーパー、チェーン展開している洋菓子屋で売っているような100円〜300円程度の代物とはまったく違います。

お値段は1個850円ですが値段と味を秤にかけると安いものです。その味はまさしく至高、すべての食材はパティシエ自身が自らの手で探し吟味した一品のみで作られています。

そのまま食べると少し甘いと感じる人がいるようですが、そんな人はまだまだまだド素人中のド素人、少し苦みがありますが癖のない大人の味に仕上げたカラメルソースを絡め一緒に頂くのが基本です、まずこのプリンを頂くには絶対に！！何があっても！！！！！！！！

小皿が必要です！！！！！！

このプリンの形を崩さぬように慎重に小皿に移すには、まず蓋を開けプリン（・・・）の（・・）容器の（・・）上に小皿を（・・）乗せて（・・・）からひっくり返します。これは鉄則です。

仮にも容器を逆さまにしたら中のプリンが零れかねませんから。

しかし小皿ごと逆さまにしたらそのまま持ち上げてはいけません、まず容器を優しく叩き完全に落ちるのを確認してからゆっくり外しましょう。

外す瞬間はカラメルソースが下に滝のごとく流れ落ちるさまを見てから食します。

その味は口に入れた瞬間に下で踊りのどにスルリと落ちていきますが、そのプリンにはスプーンですくうと分かるように、しっかりとした重量感があります。

プリンはしっかりと深みのある味わいですがいつまでも長つたらく舌に残らず潔く去っていきます。その去っていく味が寂しく、一口、また一口と口に運んでしまうのです。

「フウ・・・・・・・・・・さて・・・・・・・・・・頂きましょう・・・・・・・・・・」

私は巾着袋の中に入っている二つのプリンを取り出し、テーブルの上に置きました。

どこからどうみても確かに『レガリア』です。

実はこのプリン『レガリア』は味だけではなく見た目も楽しめます。プリンの容器は有名な絵描きの先生がデザインし、容器の種類は何と100種類もあるそうです。私は残念ながら30個しか集めていないので残念です。

余談ですが容器だけでも数万円ほどで買い取るコレクターがいるようです、私なら絶対に売りませんが・・・・・・・・・・

ちなみにこの二つはすでに持っていますね。一つは梅、もう片方は桜の絵が書いてあり、桜は私が一番のお気に入り絵柄です。

では前置きはこのくらいにして頂きましょう。

「小皿・・・・・・・・小皿・・・・・・・・」

巾着袋を探りますが入っていないようです、スプーンならあります・・・・・・・・

どうしよう、こうなったら苦肉の策として弁当のふたを小皿代わりにする方法もありますが、お弁当の中身の味が移ってしまう可能性もあります。

それではこの『レガリア』の味を100%引き出す事が出来ません。仕方ありません、愛用の小皿を葬儀社から持ってきてきましょう。少し面倒ですが仕方ありません。私はそう決心し、とりあえず二つのプリンを爆弾処理班以上に慎重に持ち運び冷蔵庫にしまえます。

「いざ葬儀社！！」

私は全力で走り始めました、そう、プリンのために・・・・・・・・

数時間後

私は息絶え絶えに六本木に到着しました、見慣れたボロボロの町並みは前回の奇襲作戦のせいでさらにボロボロになり、真新しい血の痕が見受けられます。

途中で私は目的を忘れふと足を止めました、私の視線の先には牛乳瓶を花瓶代わりにして白い小さな花が添えられていました。

そう、この場所は私が助けられなかった人がいた所です。

脳裏に焼きついた光景が目につかびます、GHQの兵士に無残にも撃ち殺され、すさまじい爆炎に呑みこまれる人たち・・・・・・・・

私は添えられた花に近づくと膝をつき手を合わせました、こんな事をして償いにはなるとは思いませんが、せめてこれぐらいはしたいのです。

あの時私は容赦なく裏切り者を撃ち殺しましたが、あの行為は掃討作戦を行ったG H Qの兵士にも引けを取らない劣悪な行為です。結果的には人質を殺さなかったダリル以下の人間ですね。

もしもシユウなら裏切り者を許したでしょう。

もしもガイなら裏切り者を殺したとしても、動揺の一端を後で声に出し悔むでしょう。

私は獣です、かつて仲間だった人間を殺しても表情一つ変化させませんでした。

許すと言われなくても構いません、許してほしいともいいませんが、ただ償いだけはさせてください。

そう口に出し、再び死者に祈る。

こんな私でも、つい心の中で涙を流してしまいそうになります、しかし泣く訳にはいきません。泣いたら止まってしまいます、止まったら振り返ってしまいます、振り返ったら二度と動けなくなってしまうます。

私は泣くまいと思いつつ、目を開けました。

するとそこには花束を持ったガイが立っていました。

「聞いていました？」

私とガイの間に夏の風が吹き、その後ガイは口を開きました。

「ああ」

「立ち聞きとは趣味が悪いですよ」

するとガイは心外だと言わんばかりにいいました。

「話しかけようと思っていたら次郎が勝手に喋り出した、人のせいにするな」

「それは申し訳ございません、つい言葉にしまったのですよ」再び私とガイは沈黙して一輪の花を見つめます。どこかで見た事のある花だと思いましたが、あの時ダリルが持っていた花ですね、遠目ではよく見えませんでした。が改めて見ると綺麗な花です。

「次郎、お前はなぜ葬儀社にいる？」

ガイは黄色い花の隣に花束を置いて聞いてきました。

「簡単ですよ、それが葬儀社と言う場所が

」

答えるとガイはニヤリと笑い、その後手を合わせました。

「最高の答えだな、お前らしい」

「ふむ？怒ると思ったのですが？」

以外ですね、絶対に殴られると思って答えたのですが・・・

「その言葉の通りだからな、俺はそろそろ戻るぞ、夕方前には帰ってこい、シュウに会いに行く」

そう言つてガイは去ろうとしますが私は引き留めました。

「ガイ、すいませんが車出してもらえます？」

さすがに歩いて戻るのは辛いです・・・

第11話 至高の黄色 後悔の花（後書き）

ガイの質問の答えは追々判明します。

ちなみにですが、次郎は17歳以上なのでヴォイドを出す予定はありません。

第12話 仕事（前書き）

今回は話がまったく進みません。
更新が滞っているのに申し訳ないです。

第12話 仕事

ちようどお昼の12時ごろ、目当てのお皿とついでに雑貨類を持った私は大雲に元大学の廃屋まで送っていただきました。

車で送っていただけるのでつい沢山持ちすぎてしまいました、まるで登山に行くようなリュックの膨らみそうですね。

「次郎さん、3時ごろに迎えに来ます」

「はい、ありがとうございます」

大雲はそれだけ言うのを車を進ませ、さっさと帰ってしまいました。私はああいう大雲の寡黙なところが気に入っています、体は大きく力持ちで心優しいとはまるで物語のキャラクターのようですね。

「さてと・・・・・・・・・・・・・・・・」

リュックに入れた重い荷物を背負いつつ、ゆっくりと橋を渡ります。背中の荷物はガチャンガチャンと音を立てますが、大事な小皿はしつかりと梱包したので割れる心配はないでしょう、壊れて困るのは部屋から持ってきた秘密兵器とその作り掛けが壊れてしまう事です。実は数年前に秘密兵器2のワサビスプレーの原液を製作途中で部屋一面に溢してしまい困ったことになりました、しかし真に困るのはその後でした、部屋の中が暑くなっていたので溢した原液が気化し、ガス状になり葬儀社本部を混乱の増埒に叩き落としました、あの時はガイたちに本気で怒られましたっけ・・・・・・・・・・

過去を振り返りつつ廃屋に入ります、ソファーに座りプリンを頂く前に荷物の整理を行わなくてはいいけません。

とりあえずリュックの中に入っている物を全て出します、まず包装紙で包んだ小皿、そして大事な秘密兵器とその作り掛け、その他雑貨類をシュウが作ってくれたお弁当を片手に整理するとしましよう。

30分後

それほど時間はかかりませんでした、秘密兵器はかなり持つてきましたけども不具合はなく、正常に作動しました。作り掛けも問題ないようですね。

雑貨類は端に置いておけば問題ないでしょう。

さて、そろそろ本番です。『レガリア』を頂くことにしましょう。冷蔵庫に近づき『レガリア』を一つ取り出します、しかしその時、辺りに電子的な機械音が流れました。

ピピピ　ピピピという聞きなれた音です。

「こんな時に電話ですか．．．．．」

私はポケットの端末を取り出すとどうやらガイのようです、一体何の用でしょうか？

「氷野櫨、いますぐ出かける準備をしろ、本部仕事だ」

「．．．．．一体どういう事ですか？」

「少し事情が変わった、１０分後に迎えに行く」

これから『レガリア』を食すと言うのに．．．．．

「あの．．．．．行かないという選択肢は．．．．．」

「ない」

ですよね、さすがに我儘をこれ以上言う訳にはいきませんが、葬儀社に戻ったら前以上に働くと言ってしまいましたし。

「分かりました、待っています」

「迎えに行くのは大雲とキヨウだ」

「キヨウ？」

大雲が迎えに来るのは分かりますがなぜキヨウが？

「お前、葬儀社に戻ってからキヨウにあってないだろ、どうしても会いたいらしい」

言われてみるとそうでしたね、顔ぐらい見せなかったのは失礼でした。

「了解です、何か持っていく物は？」

「そうだな、強いて言えばお前のあやしげな秘密兵器を適当に見つ
くろって持つてこい」

「私の秘密兵器？構いませんが………」

「頼んだぞ」

ガイはそれだけ言うとは切ってしまいました、一体どういう事でしょ
うか？ガイは私の秘密兵器をあまり好んでいないはずでしたが……

……

まあよしとしましょう、今必要な物は最大限利用すべきですからね。
一先ず『レガリア』を冷蔵庫にしまい、整理した秘密兵器を再びカ
バンにしまいはじめます、しかしせっかく整理したので面倒な物で
す。

悪戦苦闘しつつ秘密兵器をリュックにしまいおわると、ちょうど大
雲とキヨウがやってきました。

「氷野樫さん！！やっと会えました！！」

シオルダーバッグを身に付けたキヨウは私の元に駆け寄り、大雲は
ノソリと現れました。

「キヨウ、私の顔が見たいなんて奇特な人ですね」

「そんなことないです！！本当にうれしいんですから！！」

天真爛漫といいますが、キヨウは本当にいい子ですね、こういう子
はあまり葬儀社に出入りしてほしくないのが本当のところ。あ
そこはとても危険ですから。

「キヨウ、氷野樫さん、そろそろ」

大雲は急かすように私とキヨウを呼びます。

「すぐに行きます、大雲、申し訳ありませんがリュックを持って頂
けますか？さすがに重くて持つのが大変です」

お願いすると大雲は小さくうなずきリュックを持ってくれました。
しかし持つ時大雲の顔は一瞬歪みました。

「氷野樫さん、これは一体何キ口あるんですか？」

「分かりません、100キ口は絶対にはないと思いますが………」
「」

その言葉を聞いたキヨウは苦笑いしていましたが、実際かなりの重さですから結構危険です。落としたはずみで大爆発とか起こしかねませんし。

「行きましょう」

大雲はそう言つてリュックを担ぐと先に出て行きました。

「では私たちも行きましょう」

「はい！！」

キヨウは私の後を小走りですいてきます、子犬に懐かれた少年時代を思い出してしまうのはなぜでしょうか？キヨウが子犬に似ているからですかね？

「氷野樫さんはなんであんな廃屋に住んでいるんですか？本部はもつと綺麗で過ごしやすいのに・・・」

「それもそうですが私の場合は過ごしやすさより、別の事に趣を置いて生活しているのですよ」

「別の事？」

「ええ、人間の生活で欠かせないのは『衣・住・食』です、私は『食』です、おいしい物が頂けるのであればある程度酷い環境でも生活しますよ」

橋を渡るころには大雲はすでにジープに乗り込みエンジンをかけています。

さすがに急いだほうがいいですね。

「あそこで『食』って・・・」

キヨウは立ち止まり振り返りと廃屋を見つめる、私の言葉に違和感を覚えたのでしょうか。

さすがにあんな所でおいしい料理が味わえるとは思えないですよね。「とある男の子と約束を交わしまして、助けるわかりに3食+デザートを頂くんですよ」

「そんなにおいしいんですか？」

「おいしいと言えはおいしいのですが、強いて言えば・・・」
・口に合うんですよ」

本当においしい料理を食べたいのであれば高級なレストランにでも入ればいいのですが、□に合う料理とは中々見つかりません。

「□に合う？」

「味付けとかそういうものではなく………□で言うのは難しいですね」

そう言うとは私はジープに乗り込んだ。キョウも続いて乗り込み首を傾げる。

キョウが分からないのも無理ありません、私もよく分かりませんから。

「行きますよ」

大雲はそう言うのとゆっくりとジープを発進させた。

「そういえばキョウ、ガイは私に何の用で呼んだのですか？何も聞いていないのですが………」

「それは………」

急に空気が重くなりましたね、もしかして結構外道な仕事ですか？

「氷野樫さん、今回の仕事の内容は端末に送信しておきます」

大雲は運転しながら座席付近にある端末を操作し始めた、数秒後私の端末にあるデータが送られてきました。

これはなかなか………

「氷野樫さん、一体何のしごと」

横から端末を見ようとするキョウの視界を閉ざし端末をしまつ。

「キョウは見てはいけません」

あまり純粋な少年に見せられるような内容ではありません、正直好ましくありません。

陰鬱な心持をしつつ、ジープは葬儀社本部に向かって行きました。

第12話 仕事（後書き）

次回こそ、早めに投稿します。

感想、良い点、悪い点、分かりにくい個所がありましたらよろしく
お願いします。

第13話 工夫すればやれない事なんてない（前書き）

今回はグロ注意かもしれません。

第13話 工夫すればやれない事なんてない

空は青く澄み渡り雲一つない天気、そよ風が通り抜け頬をくすぐり、暖かい日差しの過ぎoshiやすい日です、このまま土手に行き昼寝をするのは最高に気持ちのいい事でしょう。

しかし、そんな天気と願望とは裏腹に私の心は重く沈痛なもので、今いる場所は埃っぽい葬儀社本部です。

ここは上を見上げればクモの巣の張った天井が見え、風は何かの排気ガスの香りがして日差しなんてまったくありません。

やはり生活環境を改善したほうがよろしいかもしれませんね。

「来たか氷野樫」

大雲とキヨウに連れられ私は部屋の前に来ました、あまり見覚えのない部屋で扉の前にはアヤセとガイがしかめっ面で立っていました。

「来たか、資料は勿論呼んだな？」

ガイは私の姿を見るなりいきなり聞いてきました、また焦っているのでしょうか？

「ええ、一応見ましたが……なぜこんな事に？あなたらしくない手だと思つのですが？」

「あの……私のせいなんです」

その場にいたアヤセがポツリと呟いた。

「どう言う事ですか？」

アヤセは泣きそうな顔で話し始めた。

「私が買い物に行こうとしたら男の人が絡んできて、つい……
……」

「つい？」

「足を払って頭から落としてしまったんです……」
その光景が頭の中で容易に想像できました、アヤセはかなり初心な所がありますから我慢できなかったのでしょうか。

「それが六本木の住人だったらよかったのだが、それがG H Qの幹

部だと言つのならば話は別だ」

「で、拷問と言つ訳ですか？」

「言い方が悪い、尋問と言え」

ガイは眉間にしわを寄せて言いました、私からすればどちらも似たようなものだと思うのですがこの際どうでもいいですね。

「今回の私の仕事はGHQの幹部から有益な情報を聞き出す事ですね？」

ガイは小さく頷くと扉を開けました、そこにはボロボロの服を着た一人の男がこちらを見ていました。

男のその目は自身に溢れ、如何なる者にも屈しない覚悟と根性が見てとれます。

これは結構面倒な相手ですね。

とりあえず近づいて話しかけてみることにしましょう、まずはコミュニケーションをとらなくてはいいけません。

「始めまして、貴方のなま

その瞬間、いきなり唾を吐きかけられました。男が吐きかけた唾は私の眉間を直撃しダラリと垂れた。

「話す事などない、私を開放しなければGHQの兵士がここに大挙してくるぞ」

それだけ言つと、何も言う事はないと言わんばかりに男は目を閉じてしまった。

私は黙つて部屋を出た。

「氷野櫂、手ごたえは

」

部屋を出るとガイは話しかけてきましたが、私の顔を見た瞬間冷や汗を流し始めました。

「ガイ、すいませんが何か拭く物を」

「あ、あのこれを使ってください」

キヨウは横からタオルを渡してきた。私はありがたく使わせてもらい顔を拭く。

「ガイとアヤセにはお使いをお願いします、やって頂けますね？」

私は二人にお願いすると黙って頷いてくれました。

「分かりました、何をすれば？」

アヤセは顔を引きつらせながら聞いてきました。

「近くのスーパーで×××××と×××××を買って来てください、少しばかり遅くなっても構いません」

買ってくる物を言うと二人は不思議そうな顔をして首を傾げる。

「そんな物を何に使うんですか？」

「何を吐かせればいいか分かりませんが……あの男の人が喋りやすくなるようにお手伝いするのに必要なですよ」

思わず笑みがこぼれる、さすがにあの程度の事で怒りはしません、ええ怒っていませんとも、しかし少しイラッときただけです。

「アハハ……そうですか……」

キヨウは若干引いているようですが仕方ありません、今の状態で鏡は見たくありません。

「大雲、部屋にいる男を目隠しして釣るして置いてください、眠らせても構いません、それと耐火性のある銀のトレーとガスバーナーを用意しておくように」

私の言葉を聞いた瞬間、周りの皆は顔を青くする。皆さんは一体どんなことを想像したのかはすぐに分かります、考えが安直ですね。

「皆さんには人を傷めつけない尋問を見せましょう」

さて、どのくらいで口を割るのか楽しみです。

「ウウツ………??」

俺はカツンツと言う鉄の音を聞いて目が覚めた、しかし何も見えな

い。
目隠しをされているという事に気づくのの数秒かかってしまった。
視界が布らしき物に遮られているので状況はよく分からないが、分

かる事と言えば両手を縛りあげられ吊るされている事と、上半身裸だと言う事だ。

「目が覚めましたか？」

若い男の声が聞こえる、声が反響してどこにいるか分からないが、俺が何かの薬品で眠らせられる前に聞いた声だ、おそらく俺が唾を吐きかけた優男だろうが俺は何も答えない。

自慢じゃないが俺は痛みにはかなり強い、そして拷問に耐えうる精神力だっけ持っている。

絶対に吐く事はない。

「質問をします、あなたの名前は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

辺りを沈黙が支配する、俺はこの後何かしらの痛みが来ると予想した、しかしいつまでたっても痛みはこない、俺から何かしらの情報を吐かせようと拷問するかと思ったのだが違うのか？

「知っていますか？人間の肌は一定の高温で焼かれると冷たく感じるのですよ」

優男はいきなり喋りはじめた。

「その温度の炎で焼かれると痛みもなく、冷たい感覚と肌を焼かれた時に流れる体液と肉の焦げた匂いがするんです、こういう風に」その言葉の直後、ボツと言う音がしたと思うと俺の背中に冷たい感覚と肉の焼けるにおいがしてきた。

「ウワアアアアアアアアアアッ！！！！」

コイツ！！俺の背中をバーナーで焼いてやがる！！

徐々に俺の背中から液体のようなものが流れ始めた、きっと血か何かだろう。

「どうですか？お話す気にはなりましたか？」

狂ってやがる、コイツは人を焼き殺しても何も思わない、そんな人間だ、まっとうな人間が人を焼いて平気でいられるはずがねえ。

こいつは間違いなく狂人だ、葬儀社って言うのは全員こういう奴ばかりなのか！？

「話ませんか？それならもう少し焼くだけです」

再び背中に冷たい感触と肉の焦げるにおい、そして背中を伝う血、だが話す訳には……

「肉の焼ける香りって………すごくいいですよ？食欲をそそる」

その言葉を聞いた瞬間、俺の心は完璧にへし折られた。

体中に怖気が走り、まるで背中に氷か何かで撫でつけられたような感覚で、体の震えは止まらずに歯をガチガチさせる。これ以上続けられたら体の前に心が壊れる、背中に血が流れ落ちる感覚を感じながら、力なく俺は喋る。気持ち的にはあきらめに近いかもしれない。

「分かった………話す、何でも聞け」

「よかった、では質問します」

「

第13話 工夫すればやれない事なんてない（後書き）

感想、誤字脱字、よく分からない点がございましたらよろしく願
いします。

第14話 ネタばらし（前書き）

そろそろ年が明けます。

予告の通りなんとか投稿できましたが番外編は分かりません、しかし、なんとか間に合わせて見せます。

第14話 ネタばらし

俺はこの後聞かれた事を洗いざらい話した、最初は俺の名前、家族、生い立ち、次の作戦、誰が指揮をとるか、それだけではなく部隊の人数や使用する機器、本当に全てだ。

この事が知れたら処分どころではすまないだろう、皆には迷惑をかけてしまう。

すまない、己の身の可愛さのあまり洗いざらい喋ってしまうなんて・・・

「まあこのくらいでいいでしょう、お疲れ様です」

「もう好きにしろ、殺せ」

「何を言っているんですか？私は暴力や死、殺す事が嫌いです」

白々しい事を言う奴だ、今の今まで俺の事を拷問していたくせに。

「沢山話してくれたお礼と言っては何ですが・・・」

その時、俺の口に何かが突っ込まれ、口にヒンヤリとした感触が広がる。

一瞬口にガスバーナーが入れたと思ったが違った、口内には甘いイチゴの味が広がり、同時に視界が回復した。

目の前には優男がニヤケ顔で立っており、こいつが目隠しを外したのだろう。

「それは話してくれたお礼です、後でそのステーキを頂いても構いませんよ」

そう言つて男は俺の体を90度左にずらした、そこにはいい感じに焼き色のついた3cmほどのステーキが銀のトレイの上に置いてあった。

「なっ!？」

「仲間が良い肉をスーパーで買ってきたんですよ」

それだけ言つと男は去っていく、俺は最初に妙な気恥かしさを覚え、次にそれが怒りに変わって言った。怒りのあまり口に含んだアイス

の棒を歯で噛みちぎり吐きだす。

「あの男！！！！絶対！にゆるさあああああっん！！！！！！」
絶対に復讐してやる……………」

私は尋問の後ガイの部屋によりました、勿論結果報告の為です。

部屋のドアをノックし応答を待ちます、するとすぐに入れと聞こえました。

「失礼します」

部屋に入るとガイは上半身裸でベッドに横になり輸血の途中でした。この姿を写真に撮りアヤセに売ったら高値で買ってくれそうですね。

「調子はどうですか？」

「よく見えるのなら次郎の眼は節穴だ、スナイパー失格だな」

憎まれ口を叩きますがその顔はあまり優れていません、顔は青白く目元には隈が出ています。最近忙しいので体調を崩してしまったのでしょうか。

「それは困りました、それはそうとこれが結果です、かなり聞けましたよ」

私は尋問の応答をまとめたデータをガイに見せる、すると少し顔がニヤケました。

「よく聞けたな？焼いたのか？」

「ええ、ステーキを」

ガイは一瞬笑いを堪えようとしたが、すぐに嘔き出しました。

「まさかあんな尋問の仕方があったとはな、どこで学んだ？」

「企業秘密です」

さすがに映画からとは言えませんが、言ったらガイの面白い表情が見えると思いますがやめておきましょう。

「相変わらずの秘密主義だな……………まあいい、そろそろ行

くぞ」

ガイは起き上がるとベッドを降り、フラフラと歩きはじめました。

「やはり寝ていたほうが……」

「心配ない、俺が着替えている間に大雲とツグミを集めてくれ」

そう言うと言いが悪そうに着替えを始めました、止めてもいいのですが口で言っても聞かないでしょうし結果的に実力行使になりそうなので止めておきましょう。

ガイを気絶させてアヤセに文句を言われるのは嫌ですし。

「分かりました、先にジープに乗っていますよ」

私は若干の不安を感じながら部屋を出ました。心配ないと言いつつ倒れでもしたら大爆笑してやりましょう。

部屋を出て廊下を歩いているとアヤセを見つけました、たまに見かける可愛い私服を着て同じ所を行ったり来たりしているようですがどうしたのでしょうか？

「アヤセ、どうかしましたか？」

話しかけるとアヤセは顔を赤くして言い淀みました。

「えっと……ガイに……」

「ガイ？それなら部屋にいましたけど？」

「それは分かってます」

アヤセは雰囲気的なんとも踏ん切りが付かないと言った風情でした、私が先ほどガイとスーパ―にお使いをお願いした時何かありましたかね？

もしかしたら余計な事をしてしまったかもしれません。

「アヤセ、先ほどのお使いでガイと何かありましたか？」

そう問かけると赤かったアヤセの顔がさらに赤くなり、顔が俯いてしまいました。

「いえ……その……」

「やはり余計な事でしたか……」

私とした事がミスをしてしまいましたね、良かれと思い行動したのですが失敗してしまっただけです。

「いえそう言う訳ではないんです」

「では一体？」

「買い物に行った時、ガイに思い切ってまた出かけませんか？と言ったんです、そしたらガイは時間があつたらと……」

「アヤセも中々積極的じゃないですか、このまま進展なしに終わってしまうと懸念していましたがいらぬ心配だったようです。」

「よかったじゃないですか、これからガイをデートにでも誘いに行くのですか？」

「えっと……どう誘えばいいか……」

「アヤセは俯き、それつきり口を噤んでしまいます。なるほど、それで迷っていた訳ですか、しかもガイは暇なときと言ったのですから、この忙しい時に時間がとれるわけも、これから時間が開く根拠もないでしょう。」

「ですがそれではアヤセがあまりにも不憫です、ここは一つ年上をして手を貸しましょう。」

「アヤセ、私とガイ、それとツグミに大雲でこれから少し出かけるのですが、近いうちにガイが時間を取れるように手を回しましょう」

「でも迷惑じゃ……」

「年上の行為はありがたく受け取る物ですよ」

「私はアヤセの頭を軽く撫でる、昔は小さかったのにこんなにも大きくなり、一人前に恋愛をする年頃になってしまふなんて……」

「自分が年寄りになつた気分です。」

「ありがとうございます……」

「いえ、お気になさらず」

「私はアヤセの頭から手を離し、ちょうどいいのでツグミの居場所を聞くことにしました。」

「アヤセ、ツグミがどこにいるか知りませんか？探しているのですが……」

「ツグミならエンドレイヴの調整中です、まだいると思いますけど・

「……」

「ありがとうございます、では期待して待っていてください」
私は足取り軽くツグミの元へ向かいました。

数分ほど歩き、私はツグミの元へ行きました。

アヤセの言うとおりの端末に向かいまだエンドレイヴの調整をしていたようです。

ええ、それは全然問題ないのですが……

「ツグミ、なぜそんな恰好をしているのですか……?」

ツグミの姿は相変わらずボディラインが出るピッチリとしたスーツを着ていました、だいぶ前にはこまめに着替えるように注意したのですが……

「あ、次郎、そろそろ時間?」

「『あ、次郎』ではありません、ツグミはまたそんな恰好を……」

「いいじゃん、別に迷惑かける訳じゃないし」

「それもそうですが、その恰好は少しはしたないと思いませんか? 女の子の格好とは思いませんよ、コスプレではあるまいし」

しかし私の話もほとんど聞かずにツグミは端末を操作し続けた。

こうなったら実力行使で行かせて貰います。

ツグミの後ろに立ち拳を握り、若干力を抜いて頭の上に拳を振りおろしました。

ゴツンッ!!--と面白い音がしてツグミは頭を押さえ悶絶します。

「いったあ~~~~~!!!!!!」

「年長者の言う事を聞きなさい、すぐに着替えて外で待っていないさい、大雲を連れてジープの準備をします」

私はさっさと大雲を探すためにその場から立ち去りました、

それにしても手が痛いです・・・

番外編 1 アヤセとガイの買い物（前書き）

なんとか間に合いました。

番外編 1 です、次は年が明けてすぐにでも書きたいと思います。

番外編1 アヤセとガイの買い物

子供ならおやつを親にせがんでいる時間帯、葬儀社のリーダーである恙神^{ツツガミ} 涯^{ガイ}とエンドレイヴのパイロットである篠宮^{シノミヤ} 綾瀬^{アヤセ}は、六本木に最も近いスーパーで買い物をしていた。

ガイは片手に買い物かごを持っているので、見る人が見ればかなり面白い。

買う物は棒付きアイスとステーキ、氷野櫛に頼まれた用途不明の物だが頼まれたのだから買わない訳にはいかない。

本来ならばこんな軽率な行動を控えるべきだろうが、こんなところに稀代のテロリストが車いすの少女と買い物をするとは誰も思わないだろう。

アヤセは私服でガイの上半身は黒いシャツに下のズボンには葬儀社の物なので問題はないだろう。

むしろ買い物客は車いすのアヤセに目を取られ、隣にいるガイにはあまり気づいていないようだ。

大体平日のこの時間帯にスーパーにいるのは奥様方ぐらいであろう、その奥様方は始めてみる男など、顔が良いか、悪いかでしか判断しないだろうから関係ない。

それぞれの反応を見ても、

「まあ、あそこにいる男の人かつこいいわねえ」

「あら本当、でもどこかで見たことない？」

「きっとテレビの俳優か何かよ、隣の子は彼女ね、お忍びで来ているのよ」

等と、日ごろ家事で忙しい奥様方からすればそんな物だ。

だがアヤセはそうはいかない、アヤセは先ほどの会話をしかと聞いてしまい、ガイの彼女なんて言われたら頭の中は祭りと大火事が来たような大騒ぎだ。

「アヤセ、顔が赤いが大丈夫か？」

そんなアヤセの気も知れない朴念仁は、アヤセに顔を近づけ聞いてします。

むしろこの反応をしていながらも、アヤセの気も知らない振りをするのであれば、この男、^{ツッガミ}恙神 ^{ガイ}涯は相当なゲス野郎である。

「いえ！！大丈夫です！！」

アヤセは手と顔をブンブン振り、何でもありませんよとアピールをするのだが、そのアピール自体がなんでもなくない。

「そうか？まあいい、すぐに頼まれた物を買うか」

ガイは不審に思いながらも精肉売り場を目指した、アヤセはそれについていく形だ。

ガイは最短距離で精肉売り場に行くために、棚と棚の狭い道を通ろうとするがアヤセは角でつかえてしまった。

角に置いてあった商品はバラバラと落ち、車輪で踏みかける。

普段なら問題ないのだが、ガイと一緒に買い物と言う状況下で車いすの操作を誤ってしまったのだ。

「あ！すいません！！」

落ちた商品を拾おうとするが届かない位置にも商品が落ちてしまい、それを取ろうとすると他の落とした商品を踏みつぶしかける悪循環に陥る。

「手を貸そう」

ガイもすかさず手を貸し、商品を元通りに並べて言った、見事なフオローではあるがゴシップに飢えている昼下がりの奥様方にはいいのだ。

「まあ奥さん見てください、男であれば車いすを押してあげるべきですわよね」

「ホントホント、やっぱり男は見てくれだけじゃだめね、中身も良くなくちゃ」

思いのほか大きな声で喋る奥様方の声は、勿論ガイとアヤセの耳にも届いておりガイは冷静な声でアヤセに言った。

「アヤセ、配慮が足らずにすまなかった、かごを頼む」

ガイはアヤセに買い物かごを渡すと後ろに回り、背中の鉄部分を持つと押し始めた。

「いえ！！大丈夫ですから！！」

「気にするな、たまにはいいだろう」

アヤセはガイのその言葉を聞いて黙りこくる、最近アヤセとガイは忙しく前ほど話す機会も減ってしまった、氷野櫨は怒っていたようにも見えたが、実はこれは粹な計らいなのかもしれない。

二人は会話を交わさず精肉売り場に向かった、辺りには買い物客と店員の喧騒と、一昔前のヒットソングが流れていた。

すぐに精肉売り場に到着するとガイは肉の吟味を始めた。

「アヤセ、これでいいか？」

ガイはアヤセに率直な意見を求めた、実際ガイはステーキを買ってこいとは言われたが、細かい事は聞いていなかった。

ならば氷野櫨に聞けばどうかと一瞬考えたが、今の氷野櫨とは話したくはない。

その時、アヤセはふと氷野櫨の言葉を思い出す。

氷野櫨は確かにこう言った。

『少しばかり遅くなっても構わない』

「ガイ、もう少し考えませんか？氷野櫨さんが遅くなっても構わないと言っていましたし、きっと考えて買って来いって意味だったんですよ」

ガイには申し訳ないという気持ちと、氷野櫨に感謝の気持ちを持ちつつその言葉を発した。

「そうか？それならどれがいいと思う？」

「そうですね・・・」

アヤセはなるべく時間をかけゆつくりと考えた。

その日、スーパーの一角は暖かな雰囲気に包まれた。

帰り道の事である、スーパーで買った特上牛肉100g4600円と、箱で売っているお徳用棒付きアイスを買って帰っていた。

アヤセはガイに車いすを押してもらいスーパーの袋を持っていた。

「ガイ、どうせですからここで一本食べませんか？」

アヤセは思わず思いつきで提案した、ここで一本食べればその分ガイと長い時間を過ごせるからだ。

「そつだな、では一本頂こう」

ちょうどバス亭を発見し、ガイはベンチに座った。

「どうぞ、私のお金ではありませんが」

アヤセは箱の封を開けガイに向けた、ガイはアイスが無造作に選ぶ袋を開け口に含んだ、アヤセも続いてアイスの味を確認してから食べ始める。

この時アヤセはしばしの沈黙が流れると予想をしていたのだが、そうではなかった。

「たまにはゆつくりするのもいいな」

「え？」

ガイはポツリと言った、きっと本人は何気なく言ったのだろう。

この時アヤセはガイの言葉は千載一遇のチャンスだと考えた、もしかしたらこの勢いでデートに誘えるかもしれないと。

アヤセは深呼吸をしてはやる鼓動を少しでも抑えようとする、息は荒く手が震え汗が滝のように流れ落ちる。手に持ったアイスが溶けるのも気にせず言った。

「ガイ！その……今度一緒に出かけませんか！？」

言った、いや言ってしまったと言っべきか、もしかしたら何を呑気な事を言っているのだと怒られるかもしれない。

しかし言わずには言われなかったアヤセの乙女心が確かにそこにあった。

緊張の一瞬だった、しかしガイの言葉はかなりそっけないものであった。

「そつだな、暇が出来たら行こう」

アヤセは思わず小さくガツポーズをした、この時のアヤセは内心お盆と祭りと正月が一緒に来たような喜びようであった。

「はい！！」

満面の笑みを浮かべたアヤセはガイに車いすを押されながらゆっくりと葬儀社に戻って言った。

だが、ガイは忙しく全然暇がないという事に気が付いたのは、葬儀社に戻り自分が冷静になってからであった。
なんとも涙を誘う少女であった。

第15話（前書き）

今回は次郎の過去を少しだけ書きました。
かなり身近ですがご了承ください。

第15話

日は落ちかけ、海辺の公園は綺麗なオレンジ色に染まっていた。公園の遊具と同じように僕たちもオレンジ色だった。

僕とジャックはジャングルジムの上に乗ってジャックは海の先、水平線をずっと眺めて、僕はオレンジ色の公園をボウッと見ていた。

「次郎、俺医者になる」

汚れたTシャツに短パンのジャックは母親譲りの綺麗な金色の髪の毛を靡かせてジャックは唐突に言った。

「頭が良くなきゃなれないと思うし、何でなりたいの？」

ジャックは父が日本人、母がドイツ人のハーフで目立つ子だった、自分の事をほかの人にジャックと呼ばせ、悪さばかりしていた問題児だった。

他の家のお父さんとお母さんは、あまりあの子と遊んじゃだめだと良く言っているみたいだ。

「頭が悪ければ勉強すればいいよ、それにブラックジャックがかっこいいんだ」

ジャックは綺麗な青い瞳をキラキラ輝かせていた、夢を希望に溢れているってこういう事なんだなと思った。

「ふーん、もしかしてあだ名がジャックなのはブラックジャックが好きだから？」

「当たり前じゃん！！勿論ピノ子も本間先生もドクター・キリコも大好きだ！！」

手を大きく広げてジャックは叫んだ、近くを自転車で通った中学生らしき集団は何事かと僕とジャックを見たけれどジャックは気にしていないみたいだ。

「まあいいんじゃないかな？漫画の影響で夢を追いかけるのは悪い事じゃないよ」

「だろ？あ、そうだ、次郎は夢ってないのか？」

「夢？」

ジャックに言われるまで僕は自分の夢について考えた事は何もなかった、ただ姉ちゃんに迷惑をかけずに妹をしつかり面倒見ていればそれで良かった。

「ないのかよ」

ジャックは不服そうに言った、でも心当たりは一つあった。

「一つだけ……一つだけならあるかも？」

「言ってみるよ、何だ？」

ジャックは好奇心を前面に押し出して僕に顔を近づけた、距離は10cmも離れていない。

「えっと……この国を変えたい」

僕は自分が唯一持っている夢を言った、もしかしたら笑われるかもしれないと思ったけれどそんな事はなかった。

「お前すげえよ！！俺たちガキなのにそんな事考えてるなんて！！」

「そんな事ないよ、ジャックの医者のほうが立派だ」

「いやいやいや！！医者なんてのは頭と金さえあればなれる！！でも国を変えるのはいくら頭が良くても、金があってもできるもんじやねえ！！」

ジャックは素直に感動していたと思う、全面的に感情を押し出して人の事なのに大喜び出来るのはとてもいい人間なんだと思う。

「あ、ありがとう……」

「よし！！次郎が先に世界を変えるか、俺が先に医者になるか勝負だ！！」

ジャックはジャングルジムから飛び降りて少し走ると振りむいた。

「次郎！！先にどっちが公園から出るか勝負な！！勝ったら××××××××××」

そう言つて再び走り出した、僕は勝てる見込みのない勝負はしない主義なのでゆっくりジャングルジムから降りて歩きだした。

~~~~~10年後~~~~~

月は三月、別れの季節です、桜はまだ蕾で咲く気配はあまりなく寒々しい風が吹いています。

高校の卒業式も終り皆さんは思い思いの時間を過ごしています。

後輩に最後のあいさつをする人、友人と打ち上げの相談をする人、先生に感謝の言葉を述べる人、さまざまな人がいます。

「次郎、お前はこれからそうするんだ？」

早々に帰宅しようと思った私に話しかけてきた人がいました。

ジャックです、長い金色の髪に青い瞳、昔とは違い眼鏡をかけています。

「ジャックですか、これから帰宅するところです、あなたはどうしますか？」

「そういう意味で聞いたんじゃないよ、将来はどうするんだって聞いてんだよ」

大きな声で喋るので、先生方や父兄の方々、学生みなさんも私たちのほうを見えています、いい意味でも悪い意味でも注目を集めた私たちですから皆さんが注目するのは当たり前です。

「私の事を心配して下さるのですか？」

「そうだよ！！当たり前じゃねえか！！就職先も決めてねえし進学先も決めてねえ、一体全体どういうつもりだ！！俺はずっとお前と一緒に医大に行くと思ってたんだぞ！！」

意外でした、すでにジャックは私を見捨てていたと思い込んでいたのですが、ずっと私の事を心配してくれていたなんて、かなり驚きです。

「昔の約束覚えていますか？」

「は？いつのだよ」

さすがに覚えていませんか、当然ですよ。

普通は子供の頃にした10年前の約束なんて覚えているはずがありません。

「いえ、忘れてください、でも最後に一つだけ……」

一瞬風が止み静かになる、他の皆の喧騒も聞こえなくなったような気がした。

私はジャックに近づくとそつと耳打ちをした。

「あの時の勝負、まだ有効ですよね？」

それだけ言い残し、私は一度ジャックの元を去りました。  
終わらない勝負を残して……………

## 第15話（後書き）

次こそ話を進めます。



## 第16話 アヤセとの約束（前書き）

今回も一向に話が進みません、  
次回こそは話を進めて見せます。

## 第16話 アヤセとの約束

まどろみの中、誰かが私を呼ぶ声が聞こえました。

「氷野櫛、目を覚ませ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

目を擦り辺りを見回すとそこは車の中でした、私の目の前にはタキシード姿のガイがあきれ顔で私を見ていました。

「やっと起きたか、着いたぞ」

「あれ・・・・・・・・ここは？」

すでに日が落ちていて空は暗く染まり、窓の外を見ると川べりの小さな広場のような場所です、そこには何かを操作するツグミと周りを警戒する大雲の姿がありました。

「ここでシユウと落ち合う予定だ」

「私が来る必要はない気がするのですが・・・・・・・・」

「シユウがゴネた時に説得するのがお前の役目だ」

ガイはそう言っただけで車から降りました、ガイは本当に面倒な役回り、私に押しつけますね、話術はガイが専門のようです、私は話術より肉体言語を用いた会話のほうが得意なのですがしょうがないですね、これも仕事のうちですから。

「分かりました、まあシユウなら問題ないと思いますが・・・・・・・・・・・・・・・・」

「氷野櫛はよほどシユウを気に入っているみたいだな」

私としては気に入っていると言うよりも、同族意識みたいなものではないでしょうか？

「でもあの子は有能だと思いますよ、これから伸びていく年頃ですから」

もしあの子が葬儀社に入ってくれたのならば、とても鍛えがいがありそうです。

「氷野櫛が鍛えるなら安心だな、さて・・・・・・・・そろそろ来る

ころか」

ガイは少しでも見栄えを良くするために身だしなみの確認をしました、中々見られない光景ですね。

しかしタキシードもいいですね、機会があつたら私も来てみたいです。

そう思いガイのタキシードを見ている時でした、私の端末が鳴りだしました。

画面を見るとジャックからのようです。

「すいません友人のようです、少し出ますね」

そう言つてガイたちと少し距離を置きました。

「早めに終わらせろ」

私は了解の意味を込め手を振り、通信回線を開きました。

「お待たせしました」

『おせえ．．．．．』

ジャックの不機嫌そうな顔が画面に写りました、いつも綺麗な金色の髪はボサボサになり、青い瞳は少し濁っています、しかも目の下に隈が出来ていてかなり不機嫌そうです。

「すいません、どうしました？」

『どうしましたじゃねえよ、昨日は定期健診の日だったのに何で来なかった！？』

すっかり忘れていました、最近忙しくなったのですっかりしていませんよ。

「最近忙しくて．．．．．」

『忙しいのは俺も同じだつっうゝの！！オヤジと母さんも心配してるからさっさと来い、今どこにいる？』

「．．．．．さあ？」

『あゝ あん！？いい年した男が自分のいる場所が分からねえだ！？』

大声で叫びジャックの眉間にしわが寄ります、少し怖いです。

「申し訳ありません、自分で移動した訳ではありませんから．．．．

・ ・ ・

「じゃあねえなあ。お前の住んでる所って六本木の葬儀社本部だったか？明日の昼ごろ行くから待ってる、じゃあな」

それだけ言うとジャックはすぐに通信を切ってしまいました、勝手に決めてしょうがない人ですね、しかしこちらも落ち度がありますから下手な事は言えませんし、ここは大人しく従いましょう。

私は端末をポケットにしまいガイ達がいる所に向かいました、相変わらず端末をいじり続けているツグミに状況を聞きました。

「シュウは来ましたか？」

「そろそろ来るはずだけど・・・」

「分かりました、来たら教えてください」

辺りを見回しますがそれらしき姿はありません、ちょうどいいですね、ガイに例の件を話すとしましよう。

「ガイ、少しいいですか？」

物思いにふけるガイに話しかけます。

「何だ？手短に頼むぞ」

「ええ、近いうちに1日時間を取って欲しいのですが」

ガイは私の言葉を聞いてあからさまに嫌な顔をしました、最近忙しいのは分かりますがそんな顔をしなくてもいいと思うのですが・・・

「何かあるのか？」

「ええ、あなたにして頂きたい事があります」

「言ってみろ」

「休暇です」

ガイは怒りを通り越し、あきれた顔でため息をつきました。

「無理だ」

「いえ、どうしても休暇を取って出かけれほしいのですよ、出来れば今週中に」

ここで引いたらあまりにも情けないです、人の手を借りるのが嫌いなアヤセにあれだけ大見えを切って言ってしまったのですから。

「無理だと言っているだろう、やる事が山ほどある」

「それならば全て私が引き受けます」

「一体何を企んでいる？」

「何も企んでいませんよ」

強いて言うなら企みではなくお節介です。

「だがな………」

「では条件を一つ、もし一日時間を取ってくれたのならば……」

「……」

「なんだ？」

「一つだけなんでも質問にお答えしましょう、私の過去でも何でも」

「………ね」

ニコリと笑い提案をします、これで乗ってくるとは思いません。

さすがにそこまで自惚れてはいません、ってあら？

「ガイ、そんな怖い顔してどうしました？それにツグミと大雲も……」

「……」

三人は私を怖い顔をして見つめていました、さすがにジッと見らると怖いのですか？

「本当だな！？本当に一日時間を取ったら一つだけ質問に答えるんだな！？」

ガイは私の肩を掴み叫びました。

「ええ………話はしますけど………」

そう答えるとガイはうつすらと笑みを浮かべました。

「分かった、明日なら1日時間を取る」

以外に簡単に時間を取ってくれましたね、そこまで私の過去を聞き取ったのでしょうか？聞かれればいつでもお話したのですが……

それにしても明日ですか、アヤセは大丈夫でしょうか？すぐにでもメールを送りましょう。

「ありがとうございます、詳しい時間は追って説明します」

これでアヤセも喜びますね、私としては嬉しい限りです。

## 第17話 自分の気持ち

夜のビル街の端、煌びやかなネオンが目の前に見える川のすぐ隣に僕たちはいた。

「ああ、今終わった。OAUは乗り気だ、ただ一つ条件を出された、後で詳しく報告する」

携帯で誰かと連絡を取っていたガイは携帯電話を切った、きっとこれからも作戦に必要な事なんだろう、でも僕が巻き込まれない事を切に願った。

奥には葬儀社の制服を着た猫耳らしき物を付けた女の子と、とても大きな姿の人が銃を構えて見張りをしている。

「ご苦労だったな」

「あ、いや………凄いい恰好だね、とても指名手配犯には見えないよ」

ガイのその姿は意外な服装で、お金のかかっていそうなスーツに首には何処かで見た事のあるような十字架のアクセサリーを首から下げていた。

「銃を持って走り回っているだけでは世の中は変わらないからな、ツグミ、尾行は？」

「オールクリアです！」

奥にいた女の子は手を上げてガイに合図した、きっとオペレーターか何かの仕事だと思う。

「それより何のつもり？いのりさんを学校や僕の家………」  
あの時ガイの手を取らず、せっかく平穏な生活に戻れると思っていたらこの始末だ。

次郎さんとの繋がりは切れていないけど、ご飯さえ食べさせていれば何の問題もないと思ったのに。

「問題は発生した、昨日の作戦中、俺たちを目撃した奴がいる、ポートの住人なら対処できたがどうやら外の人間、お前と同じ学校に

通う学生だったようだ」

「うちの学生が？どうして……」

「ノーマ・ジーン、聞いた事はあるか？」

「たしか最近流行っているドラッグで、それを買いにきてた？」

うちの学校でそんなドラッグを買う人なんているのか？一部素行の悪い人はいるだろうけどそこまで悪い奴はいない。

「取引の時はシュガーを名乗っていたらしい、無論偽名だろうな、お前といのりは高確率でそいつに目撃されている、探し出せ」

「そんな！？うちの学校に何人生徒がいると思っっているのさ！！見つけようがないって！！」

うちの学校の総数は詳しくは分からないけど、相当な人数がいる。

その中から名前も顔も、性別さえも分からない人を探すなんて不可能だ。

「いいや、ある。ヴォイドを取り出せ」

僕はガイのその言葉で悟った、ガイの能力を。

「そうか、見える。分かるんだね？ガイにはヴォイドが」

これで全て分かった、何で昨日の作戦であんなに細かな戦術が立てられたか。

「ほう……」

「だって分かってなきゃ、あの作戦は立てられない」

「理解が早くて助かる、確かに俺にはヴォイドが分かる、そしてあの時俺は目撃者がいるのを感じそいつのヴォイドを、見た」

その言葉はある意味恐ろしい言葉だった、何故なら僕は再び葬儀社に関わざるを得ないからだ、もしも断ったら……

「現行の災害臨時法制下ではテロリストに人権はない、目撃者に特定されればお前も無傷ではいられない、分かっているな？ヴォイドの形状はいのりに教えてある、平穏な日常が大事なら自分で守れ」  
ガイは不敵に言い放った、僕は何か言い返そうとした、その時だった。ガイの後ろに見覚えのある顔が近づいて頭をはたいた。

「いい加減にしなさい」

「次郎さん！？」

その人は得意げに語っていたガイに再びはたき、ガイの余裕に満ちた顔は崩された。

「そろそろシユウをからかうのは止めなさい、あなたももう少し大人になってはいかがですか？そんな調子では世界は何一つ変わりませんよ」

その言い方はまるで母親か小姑のようだったけど、不思議とガイもそれほど嫌な顔はしていなかった。

「氷野櫨こそ俺を子供扱いするのを止めろ、6歳しか年はかわらん」  
「6歳も下であつたならば十分ガキです、あなたがどんな立場にしようとも」

あのガイがまるで子供だ、今度どうやってガイに優位につけるか教えてもらおうと思う。

「あの、次郎さんは何でここに？」

「もしもあなたが嫌がったら説得するよう言われていましたが・・・  
・・・必要ないようですね、それとガイといのりには一つ聞きたい事があります」

「何？」

「聞かずとも分かり切っている事ですが一応聞いておきます、ガイといのり、シユウの家に泊まる事を思いつき実行したのは誰ですか？」

次郎さんは今日一番の爆弾を叩き落とした、後ろでは大きな男の人は顔をそむけ、猫耳らしき物をつけた女の子は笑いを堪えている。  
いのりは首を傾げているけれど、ガイの顔は引きつり青くなっている。

「いのりはまだ多感な時期です、男女二人で買い物したり遊んだりするくらいなら私も文句は言いません、しかしですね、出会って数日もしない二人が一つ屋根の下暮らすのはどうかと思うのですよ」  
「テロリストに倫理を説くのは不思議な気がするけれども、まったくもってその通りだと思う、いのりと一緒に暮らせてラッキーとも思



う事は心の片隅にはあるけれど、さすがに身体的にも精神的にも辛い物がある。

「いや、これは・・・・・・・・・・・・・・・・」

「これは？」

ガイが非常に困った状況に陥った時、いのりが助け船を出した。

「次郎、私がシュウの家に行くって言ったの」

「そうなのですか？」

「うん」

いのりは小さく頷いた。

「本当にいのりの意思でシュウの家に住む事を決めたのですか？」

次郎さんは最後確認した、その後僕の顔を見て何か考えているみたいだった。

「えっと・・・・・・・・何か？」

とても複雑な顔で本気で迷っているようだった。きっといのりの事を真剣に考えているんだろう、まるで娘の心配をする父親みたいだと思った。

「まあいいでしょう、本当にいのりの意思だと言うのなら、特に文句はありません、皆さん帰りますよ」

次郎さんがあっさりと引き下がる、見ているこちらが拍子抜けするほどだった。

何か考えがあるのは何となく分かってけれど、絶対にろくでもない事だと直感で分かった。

ただ一つ言えるのは、大男と猫耳少女、そしてスーツ姿のガイを引きつれて引き上げる姿は異様だった。

現在時刻は9時を過ぎた頃、葬儀社内部は静まり返り聞こえるのは私の足音だけです。

メールや電話で連絡を取ろうと思ったのですが、まったく連絡が取れず直接会いに行こうと思ったのですが、この時間帯に女性に会いに行くのは如何なものかと考えていた所です。

もしかしたら明日に備え寝てしまったかもしれません、しかし行くだけ行ってみましょう。

数分もせずにアヤセの部屋の前に到着し、数回ノックします。

「アヤセ、起きていますか？」

返事がありません、本当に寝てしまったかもしれませんのもう一度だけノックをしてから去りましょう、そう思い部屋のドアを再びノックしました。

すると中から反応がありました。

「はい起きています！！少し待って下さい！！」

部屋の中からガサゴソと音がしました。

数分ほど待つと部屋のドアが開き、ドアの隙間からアヤセが顔を出しました。

少し髪が濡れていて見慣れない服を着ていました、白いフリフリの付いたシャツとゆったりとしたズボンでした。この恰好から察するにシャワーを浴びた後なのでしょう、やはりこんな時に女性の部屋を訪れるのは失礼でした。

「急がせてしまい申し訳ありません、今お時間は取れますか？」

「大丈夫です、部屋に入りますか？」

アヤセは気を利かせて部屋に入るように勧めてくれます。

「いえ、悪いですしここで、メールでの事をお伝えしに來ただけです。」

「あの……………」

しかしアヤセは俯きました、顔を見ると私の経験則で言わせていただきますが非常にまずい事態です。一言で簡単にいえば泣きそうです。

「アヤセ……………」

「いえ、私のほうから話があるので入ってください」

「そう言う事でしたら失礼します」

そう言って部屋に入りました、始めてアヤセの部屋に入る気がします。

ソファーに座らせて頂き、少し部屋を見ました。

部屋の内装は女の子らしくところどころに人形が置いてあり、床はバリアフリーとなっていました。私の部屋とは違い隅々まで掃除が行き届いている気がします。

「あの・・・・・・・・そんなに見られると・・・・・・・・」

「ああ、不作法でしたね、申し訳ありません、それでお話と言うのは？」

再び聞くとアヤセの目は潤んできました。

「明日ガイに時間を取って頂いたと聞いて嬉しかったですけど、氷野榎さんには本当に申し訳ないんですけどお断りさせていただきますと・・・・・・・・」

その言葉を言った瞬間、アヤセの目からとうとう涙が零れました。ズボンにギュッと掴みその姿は一騎当千のエンドレイヴのパイロットではなく、一人の女の子でした。

「なぜですか？もしかして時間のほうが合いませんでしたか？葬儀社の仕事ならば私が引き受けますが？」

「違います、ガイといのりは・・・・・・・・その・・・・・・・・そう  
いう関係で、それを皆知っています」

言っている事は支離滅裂ですが、言いたい事は色恋にはあまり詳しくない私にも分かります。きっとアヤセはガイといのりに遠慮をしているのでしょう。

「アヤセ、あなたはそんな事を気にしていたのですか？まったく・・・・・・・・」

いのりやツグミにもこういう可愛らしい所があれば良かったのですが、さすがにそれを求めるのは酷ですね、いのりに関してはシユウ  
といい感じになっていただければ面白いのですが・・・・・・・・

「そんなことって・・・・・・・・」

「あまり自分の気持ちを押し殺すのはいけない事ですよ、そんな事をしていたら絶対に後悔します」

そう、私のように・・・・・・

「ですけど二人の仲を邪魔したら・・・・・・」

「心配しなくても、ガイといのりはそんな関係ではありませんよ、ガイといのりはよく一緒にいますがそのような関係ではない事は私が保証します、ですからガイとのデートを楽しんでください」

「本当ですか？」

「ええ、本当です」

さすがにここで嘘をつくような非情な性格はしておりません、第一そんな事をしてなんの得があるというのでしょうか。

私はアヤセの頭にポンツと手を乗せ撫でる、こうしていると私が学生だったころを思い出します。

「ありがとうございます・・・・・・」

「明日に備えてそろそろ寝なさい、明日はガイがエスコートするでしょうから心配ありませんよ」

実はガイにはすでにアヤセとのデートプランを立てるようと、メールを送っておきました。そろそろプランが決まりアヤセの端末に通信が入るでしょう。

その前に私はお暇することにしましょう。

「ではそろそろお暇します、遅くに失礼しました」  
立ち上がり部屋を出ようと思いました。

「あの、おやすみなさい」

「はい、しっかり休んでくださいね」

私はアヤセの部屋を出ました、きっとそろそろガイが気難しい顔をしながらアヤセに連絡をいれる所でしょう。

若い人たちにはもっとと人生を楽しんでほしいものです。

## 第17話 自分の気持ち（後書き）

次回は番外編2だと思います。

それ以外なら本編を書きます。

## 第18話 ジャック（前書き）

遅くなつてしまい申し訳ございません。

待っていた方がいるか分かりませんが・・・・・・（汗）

ちなみに私は弟の風邪が移ってしまいました、鼻水が止まらず四苦八苦しています。最近是一段と寒く、冷え込んできたので皆さんもお体に気をつけてください。

## 第18話 ジャック

突然で済まないが俺は医者だ、名前はジャック。こんな名前だが別にヤブ医者つてわけでもねえし、小さな女の子の助手を連れている訳でもない。

勿論この名前は偉大な俺の魂の師匠、ブラック・ジャック先生を見習って付けた訳だがな。

しかし医者つてのは難儀な職業だ、患者を助けなきゃいけないのに患者が言う事を聞きやしねえつてことはよくあるし、そもそも患者が病院に来ねえつて場合もある。

特に俺の友人がそうだ、ガキの頃からの仲間だが中々の曲者だ。最近では葬儀社つて名前のテロリスト組織の中心人物をやつてるらしい。

危ねえからさつさと止めるつて言っても聞かねえし、度々大けがをしては家の病院に転がりこんで来るようになりやがった。

それだけじゃねえ、やれ不思議な眼鏡を作れとか、それを改良しろだの言いたい放題だ。まあ趣味の範囲で作ろうと思えば作れるし、金も入るから万々歳な訳だが最近では異常だ。メンテナンスの回数が数年前の数倍に跳ね上がった、あれほど負担がかかるから使いすぎるのは止めるつて言つてんのに、聞きやしないでガンガン使いやがる、それでいて検査を受ける気なんて無いと来たもんだ、こいつは大笑いできるな。

だが、そんな奴でも友人は友人だ、あいつがいなくなるのも困る訳だから、予定の時間よりも早めにわざわざ重い商売道具をいれたトランクケースを持って、治安の悪い六本木にある葬儀社の本部に足を運ぶつてことだ。

「確かこの辺に入口が……」

辺りを見回すと浮浪者やガラの悪いのがこつちを見てやがる、そんなに金髪碧眼が珍しいってか？

まあそんなのは気にせずにはどりをうつく、そうすると葬儀社入口らしきものが見えた、ご丁寧に見張りが二人も立ってる。一人はオールバックでガタイがいい男で、もう一人は一昔前のヒーローみたいに赤いハチマキをしている男だ。次郎は見張りに話を通しておくと云ったようだからすんなり入れるはずだ。

「おいお前ら、ここが葬儀社の入り口か？」

話しかけると見張りの男二人は反応した、二人とも緊張感を持ちつつ俺を観察する。

「お前は誰だ？ここら辺では見ない顔だが」

「俺か？俺はジャック、氷野壺 次郎に会いに来た、通るぜ」

入口に入ろうとする、しかしオールバックの男は俺の前に立ち邪魔をする。

「待て、お前の名前は」

「ジャックだ、次郎の主治医だよ」

俺の言葉を聞いた男二人は驚いた顔をした。

「お前が………医者？」

「聞いていた話と違うぞ」

次郎の野郎、こいつらの話を聞いて判断するに俺の事を言い忘れてやがったな。

「聞いてねえのかよ！？ったく………文句言ってる、どけっ！！！」

「待て！！止まれ！！」

赤いバンダナの男は俺を引き留めた。

「邪魔だ！！」

俺は無意識にバンダナの股間を思い切り蹴り上げちまった。

悶絶し股間を抑え倒れるバンダナ、顔は真っ青になり脂汗を流しながら泡吹いている。

「やば………」

その光景を見たオールバックは大きな声で叫ぶ。

「侵入者だあああああああ！！！！！！」



「はあ!？」

オールバックは俺の腕を掴もうとする。

「侵入者め!」

「さわんじゃねえよ!!」

俺は思わず手に持っていたトランクケースを横に振る、するとオールバックの顎に見事にヒットし、男は冷たいコンクリートに倒れた。「うぐうつ!？」

目を回しているようで少しの間だけ意識を保っていたが、すぐに気絶した。

本格的にまずい事になってしまった、つい見張り二人をぶちのめしてしまった。このままでは言い逃れはできない。とにかく中には言つて次郎に誤解を解いてもらわねえと……そう思い、俺は葬儀社本部に入つて行つた。

ジャックが見張りを昏倒させてから数分後の事である。最初にジャックに股間を蹴りあげられた男はその後、多少ではあるが回復し本部の内部にいる仲間に通信をした。

『本部……こちらウルズ2、侵入者だ……オーバーバー』

『こちら本部、ウルズ2何があつた?オーバー』

『金髪碧眼、眼鏡をかけた白衣姿の奴が侵入した、気をつける……GHQの関係者かもしれんオーバー』

『了解、発見次第拘束する、そちらには治療班を向かわせる、通信終了』

男は最後の力を振り絞って通信をしたのか気絶してしまった、その後治療班が駆け付けると赤いバンダナの男はいい顔をして眠っていたという。

午前10時頃、外が慌ただしくなったと思うと、私の部屋に転がり込んでくる人物がいました。

「次郎大変！侵入者よ！！」

それはツグミでした、相変わらずのピッチリとしたスーツ姿ですが、今回は緊急事態のようなので勘弁してあげましょう。

「侵入者は今どこに？」

「分かんない、今は葬儀社の中を逃げ回ってるみたい」

侵入者は中々の強敵のようです。

葬儀社のメンバーは若い子ばかりですがその分体力もあり、指揮系統もしつかりしています、今はガイがいはいえその程度の事で侵入者を捕まえないなんて事はありえません。

「そうですか………現在判明している侵入者の情報を端末に送ってください、私も探します、それとガイには連絡をしないようにメンバー全員に連絡しておいてください」

「どうして？ガイに言っておかないとまずいんじゃない？」

「今はガイとアヤセはデート中なのですよ、邪魔をしてはいけません」

ツグミは一瞬ポカンと呆けた顔をしましたが、その顔はすぐに驚愕にかわりました。

「どうりで今日の朝早くから何かしてると思っただけど………」

そう言っって何か悪い事を考えついたような顔をしました、その顔を見れば何を考えているかすぐに分かります。

「尾行とかしてはいけませんよ」

「は……い」

間延びした声で返事をしますが本当に分かっているのでしょうか？

私は少し心配ですよ。

そんな事よりも侵入者を探しましょう、さすがに書類仕事なんてしている場合ではありません。

「ツグミ、侵入者を発見したら連絡お願いします」

そう言うとは私は部屋を飛び出し辺りを捜しまわった。

ジャックが来る前に侵入者を見つけないと危険ですからね。

## 第18話 ジャック（前書き）

遅くなつてしまい申し訳ございません。

待っていた方がいるか分かりませんが・・・・・・（汗）

ちなみに私は弟の風邪が移ってしまいました、鼻水が止まらず四苦八苦しています。最近是一段と寒く、冷え込んできたので皆さんもお体に気をつけてください。

## 第18話 ジャック

突然で済まないが俺は医者だ、名前はジャック。こんな名前だが別にヤブ医者つてわけでもねえし、小さな女の子の助手を連れている訳でもない。

勿論この名前は偉大な俺の魂の師匠、ブラック・ジャック先生を見習って付けた訳だがな。

しかし医者つてのは難儀な職業だ、患者を助けなきゃいけないのに患者が言う事を聞きやしねえつてことはよくあるし、そもそも患者が病院に来ねえつて場合もある。

特に俺の友人がそうだ、ガキの頃からの仲間だが中々の曲者だ。最近では葬儀社つて名前のテロリスト組織の中心人物をやってるらしい。

危ねえからさっさと止めろつて言っても聞かねえし、度々大けがをしては家の病院に転がりこんで来るようになりやがった。

それだけじゃねえ、やれ不思議な眼鏡を作れとか、それを改良しろだの言いたい放題だ。まあ趣味の範囲で作ろうと思えば作れるし、金も入るから万々歳な訳だが最近では異常だ。メンテナンスの回数が数年前の数倍に跳ね上がった、あれほど負担がかかるから使いすぎるのは止めろつて言ってるのに、聞きやしないでガンガン使いやがる、それでいて検査を受ける気なんて無いと来たもんだ、こいつは大笑いできるな。

だが、そんな奴でも友人は友人だ、あいつがいなくなるのも困る訳だから、予定の時間よりも早めにわざわざ重い商売道具をいれたトランクケースを持って、治安の悪い六本木にある葬儀社の本部に足を運ぶつてことだ。

「確かこの辺に入口が……」

辺りを見回すと浮浪者やガラの悪いのがこっちを見てやがる、そんなに金髪碧眼が珍しいってか？

まあそんなのは気にせず、に迫りをうろつく、そうすると葬儀社入口らしきものが見えた、ご丁寧に見張りが二人も立ってる。一人はオールバックでガタイがいい男で、もう一人は一昔前のヒーローみたいに赤いハチマキをしている男だ。次郎は見張りに話を通しておくと云ったようだからすんなり入れるはずだ。

「おいお前ら、ここが葬儀社の入り口か？」

話しかけると見張りの男二人は反応した、二人とも緊張感を持ちつつ俺を観察する。

「お前は誰だ？ここら辺では見ない顔だが」

「俺か？俺はジャック、氷野壑。次郎に会いに来た、通るぜ」

入口に入ろうとする、しかしオールバックの男は俺の前に立ち邪魔をする。

「待て、お前の名前は」

「ジャックだ、次郎の主治医だよ」

俺の言葉を聞いた男二人は驚いた顔をした。

「お前が………医者？」

「聞いていた話と違うぞ」

次郎の野郎、こいつらの話を聞いて判断するに俺の事を言い忘れてやがったな。

「聞いてねえのかよ！？ったく………文句言ってる、どけっ！！！」

「待て！！止まれ！！」

赤いバンダナの男は俺を引き留めた。

「邪魔だ！！」

俺は無意識にバンダナの股間を思い切り蹴り上げちまった。

悶絶し股間を抑え倒れるバンダナ、顔は真っ青になり脂汗を流しながら泡吹いている。

「やば………」

その光景を見たオールバックは大きな声で叫ぶ。

「侵入者だあああああああ！！！！！！」

「はあ!？」

オールバックは俺の腕を掴もうとする。

「侵入者め!」

「さわんじゃねえよ!!」

俺は思わず手に持っていたトランクケースを横に振る、するとオールバックの顎に見事にヒットし、男は冷たいコンクリートに倒れた。「うぐうつ!？」

目を回しているようで少しの間だけ意識を保っていたが、すぐに気絶した。

本格的にまずい事になってしまった、つい見張り二人をぶちのめしてしまった。このままでは言い逃れはできない。とにかく中には言つて次郎に誤解を解いてもらわねえと……そう思い、俺は葬儀社本部に入つて行つた。

ジャックが見張りを昏倒させてから数分後の事である。最初にジャックに股間を蹴りあげられた男はその後、多少ではあるが回復し本部の内部にいる仲間に通信をした。

『本部……こちらウルズ2、侵入者だ……オーバーバー』

『こちら本部、ウルズ2何があつた?オーバー』

『金髪碧眼、眼鏡をかけた白衣姿の奴が侵入した、気をつける……GHQの関係者かもしれんオーバー』

『了解、発見次第拘束する、そちらには治療班を向かわせる、通信終了』

男は最後の力を振り絞つて通信をしたのか気絶してしまつた、その後治療班が駆け付けると赤いバンダナの男はいい顔をして眠つてたという。

午前10時頃、外が慌ただしくなったと思うと、私の部屋に転がり込んでくる人物がいました。

「次郎大変！侵入者よ！！」

それはツグミでした、相変わらずのピッチリとしたスーツ姿ですが、今回は緊急事態のようなので勘弁してあげましょう。

「侵入者は今どこに？」

「分かんない、今は葬儀社の中を逃げ回ってるみたい」

侵入者は中々の強敵のようです。

葬儀社のメンバーは若い子ばかりですがその分体力もあり、指揮系統もしつかりしています、今はガイがいはいえその程度の事で侵入者を捕まえられないなんて事はありえません。

「そうですか………現在判明している侵入者の情報を端末に送ってください、私も探します、それとガイには連絡をしないようにメンバー全員に連絡しておいてください」

「どうして？ガイに言っておかないとまずいんじゃない？」

「今はガイとアヤセはデート中なので、邪魔をしてはいけません」

ツグミは一瞬ポカンと呆けた顔をしましたが、その顔はすぐに驚愕にかわりました。

「どうりで今日の朝早くから何かしてると思っただけ………」

そう言っって何か悪い事を考えついたような顔をしました、その顔を見れば何を考えているかすぐに分かります。

「尾行とかしてはいけませんよ」

「は~~~~い」

間延びした声で返事をしますが本当に分かっているのでしょうか？



私は少し心配ですよ。

そんな事よりも侵入者を探しましょう、さすがに書類仕事なんてしている場合ではありません。

「ツグミ、侵入者を発見したら連絡お願いします」

そう言うとは私は部屋を飛び出し辺りを捜しまわった。

ジャックが来る前に侵入者を見つけないと危険ですからね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8502y/>

---

すべてを撃ち抜くスナイパー

2012年1月13日22時45分発行